

〔資料紹介〕

日独青島戦争従軍日誌 — 山田耕一中尉 —

斎藤 聖 二

一九一四年の夏にヨーロッパで勃発した第一次世界大戦は、単にヨーロッパだけの戦争にとどまらなかった。ここに紹介する出征日誌は、その極東における壮絶な戦闘の一端を垣間見せている。日本は、同盟国イギリスがドイツと戦争をはじめたことに乗じて、中国山東省青島に拠点を持つドイツ軍を駆逐し、ドイツの中国利権のすべてを継承しようという狙いのもとにこの戦闘をはじめた。八月一日にドイツへ最後通牒を提出し、二三日に对独宣戦布告を発し、九月二日に山東省龍口に独立第一八師団を上陸させて、約二か月の戦いの末に勝利する。本日誌は、その戦闘に追加部隊として送り込まれた第六七連隊所属の一士官、山田耕一中尉のものである。山田中尉の経歴の詳細は不明だが、このとき三三歳であるから一八八二年（明治一五年）生まれということになる。この年齢でしかも中尉であるため、一〇年前の日露戦争にも従軍していたことは間違いない。日誌中に戦場経験を語って部下たちを励ます部分も見取ることができる。日独青島戦争は、そのような実戦慣れした士官たちによって最前線が推し進められた戦いであつたが、彼もまたその一人だったのである。

彼の所属部隊は、愛知県豊橋に置かれた第一五師団隷下の歩兵第二九旅団第六七連隊（浜松）である。配属は第二大隊第六中隊で、その

第一小隊長に任じられていた。^③この戦争に当たって、歩兵第二九旅団は神尾光臣大将の率いる独立第一八師団の配下に入り、戦地に向かった。旅団への動員令は九月二六日に出され、一〇月二日に動員は完結し、七日に大阪港から出帆して、一日に山東省勞山湾への上陸を果たす。

追加部隊の主な任務は、占領した山東鉄道の警備にあつた。そのため、上陸後に部隊の大部分は山東鉄道に向けて前進するように命じられる。しかし、山田中尉の属する第六七連隊第二大隊と他の一部部隊は、青島を取り囲む前線攻囲軍に配属された（日誌一〇月一日条）。それに従って山田中尉等は大きく西進し、青島攻撃軍の右翼にいたって、一〇月一四日にドイツ軍の頑強な海岸堡壘の正面に配置された。そこからの生々しい日々が、ここに詳細に記されている。

日誌の白眉は、十一月六日夜の激烈なる戦闘の描写である。^④海岸堡壘東正面の鉄条網破壊の任務遂行の際のもので、悲惨な戦闘映像を見ることがのように読むものに迫ってくる。また、その他の多くの個所でも興味深い記述がなされている。たとえば、出征時の家族との涙の別れ、出帆港大阪で歌舞伎役者中村雁治郎の自宅に宿営していること、現地での中国・中国人に対する印象、「独探」と呼ぶ中国人スパイの

処刑の話、苦しい戦地生活の叙述、兵士間の人間模様、ドイツ租借地青島の文明的諸施設への感嘆など、臨場感のある描写であるとともに資料的価値の高い記録である。なお、一〇月一三日条に、日独両軍の飛行機同士の戦闘に関する簡単な記載があるが、これがアジアで行われた最初の空中戦であった。それを地上から見た者の数少ない記述といえる。また、当時珍しかった地雷の図入りの記録も存在する⁽⁵⁾。

今回紹介できたのは、紙数の関係で戦闘終結直後までの部分だが、日誌はこのあと二月まで続く。第六七連隊は、一月二七日に衛戍地に凱旋するが、山田中尉の属する第二大隊だけは残留させられ、青島守備軍独立歩兵第四大隊として山東鉄道沿線の坊子に駐屯することになる。翌一九一五年五月二二日にいたり、ようやく山田中尉らは任務を終えて凱旋した。

註

(1) 本日誌は山田中尉の御令孫山田秀二氏の許可を得て公表するものである。また、毎日新聞社記者砂間裕之氏に大変お世話になった。この場を借りて両氏に御礼を申し上げる。なお、本日誌は、砂間記者の手により、『毎日新聞』二〇一六年一月三〇日夕刊第一面ならびに社会面において「一九一四年 日独戦の記録」と題して紹介された。そこに概要ならびに価値に関する適切な記述がされている。御参照を願いたい(毎日新聞 Web サイトでも検索閲覧可能)。

(2) 斎藤聖二『日独青島戦争 秘 大正三年日独戦史 別巻2』ゆまに書房、二〇〇一年、七一頁。同書で日独青島戦争の原因、戦闘内容、被害状況等を追った。

(3) 師団長井口省吾中将、旅団長浄法寺五郎少将、連隊長高野毅大

佐、大隊長塩谷義太郎少佐、中隊長藤川常太郎大尉。

(4) これについては公式戦史である陸軍参謀本部編『秘 大正三年日独戦史 上巻2』ゆまに書房、二〇〇一年(斎藤聖二監修)、一一五四頁、ならびに帝国連隊史刊行会編『歩兵第六十七連隊史』帝国連隊史刊行会、一九一九年、七〇頁、において山田中尉の名を挙げて触れられている。また、『歩兵第六十七連隊史』第四章「忠烈美譚」冒頭に、山田小隊の活躍が「一 決死隊の奮闘(殆ど全滅)」と題されて詳しく紹介されている。

(5) 前掲『毎日新聞』記事中に、地雷の挿画の写真が載せられているので参照されたい。

※活字化に当たり旧漢字は新漢字に改めた。送り仮名、助詞、理解できる誤字等はできるだけ原資料を尊重して残した。必要箇所は「ママ」または「」で補った。句読点、段落は適宜付けた。所々にある挿画は略したが、挿画場所に「」でその旨を記した。

一九一四年(大正三年)

十月五日

時は八月廿三日。愈々日独国交断絶し、第十八師団なる久留米師団及び鉄道連隊、特別工兵大隊など動員を令せられ、山東の野に上陸し、我軍の向ふ処連戦連勝。既に山東鉄道は我有に帰し、青島も亦漸次圧迫せられ、九月廿八日頃、全く敵は要塞内に逃げ込みたる有様に、吾々軍人殊に胸に輝く勲章を佩びざる小官に取りては、切歯扼腕征独軍に参加する光栄を夢にも見んと、開戦以来うはさ取り／＼折柄、九月二十二日正午と覺しき頃、吾耳朶に突如として響きたるはそは何物ぞ。待ちに待ちたる動員令の内命ぞ。連隊の将卒一度にどよめ

き渡り、何となく殺気に満ちたり。併しながら、茲に憂ひたるは戦時職務命課なきを如何せん。二十二日より二十四日に至る間は寝ても覚めても命課を待つ許り。二十四日正午、連隊命令により将校、同相当官は集会所に集合の報に接し、愈々戦時職務の命課ならんと勇みに／＼たちたるも、一方には又若しも補充隊に残らんか軍人の面目何にかせんと、辛らき思ひを集会所の末席に列せる其間、胸の呼動も時ならず、折柄連隊長の読み上げられる職務には赤くなり青くなり、喜ぶあり悲しむあり、憤慨するあり。斯くの如くして戦時職務の命課を終りたり。余は幸いにして第六中隊小隊長として従軍するの栄を得たり。斯くして動員令第一日は九月二十六日にして、凡百の準備も整ひ、愈々十月五日、浜松後に出征の途に就く事となつた。

此の日天気晴朗にして征独の首〔門〕出に好首尾なり。余は乗車の際に於ける人員輸送係りの任務に服したる故、若しも間違ひありては一大事と大に計書を立て、居つた。是れが為に余等の乗車時間は午後五時四十五分なるも、此の前列車の輸送法を見学する必要あり。旁々正午愈々最愛なる妻子を残して出発するべく決心をなしたのである。午前六時といふ頃、前も依頼したる市川写真師来訪したり。直ちに身仕度した。而して家族一同最後の撮影をなした。又出征の軍装にて今一つを撮つたのである。午前九時頃迄連隊に出務し、輸送に関する打合わせをなした。帰宅して、余は妻に与えるもの及び母上様に遣るべき遺言状を認めた。正午ともなりたれば、茲に家族一同別れの盃をなしつつ最後の別れと思ふた。妻は可なり頑強にて、動員下令随分余の為に臨むとか、又は生別死別の時は実に誠心込めて尽すものである。余は心の中に感謝の意を表したのである。食事も終り武装を整えたる中に、何時も如才なくしてくれるな〔註 妻の名〕は見えなくなつ

た。如何したるか二階を見れば、何にも頑是なき未だ一年と二月許かりの勇さんを傍らに、打伏して泣いて居るのであつた。余は其顔は見ざるも多分左様らしかったのである。茲に弱き心を出してあまき言葉でも出さんか、益々彼女の精神を過敏にせしむるのみと、一層快音に元氣ある言葉で次の如く言ふたのである。「余は今から行くよ。茲に遺言状あり。留守宅及御前の行動に就ては平素余の訓旨通りにせよ」。言ひ捨てて二階を下りた。而して靴を穿ち居る際、妻は愛らしき勇さんを連れて玄關にと見送たり。余は此の別れに臨んで次の如く言ひふたのである。「出征に際し停車場に見送るはよしてくれ。併し何でも気が済まんと思へば見えがくれに遙かに別れを告げくれよ。」其促迎ひに來たる車夫に命じて停車場に向ふた。丁度午後二時頃であつた。余は午後二時四十分発の列車を見送たり。此の時に於ける停車場付近は官公吏、知人、各将卒の見送り人にて、旗、国旗、提灯にて満たされ、何れもしつかり頼むと、此処でも彼処でも別れの言葉が聞かれるのである。実に頼もしき日本国民よ。又軍人は皆に、しつかりやるよ君、今に見給へ余等の軍さ振りをと、それは／＼勇敢に満ち満たされた。

欺くの如くにして、余等も亦同様別れを告げ乗車した。プラットホームには将校婦人、官公吏、愛国婦人にて満たされた。余の妻子も亦今一度の思い出と思ふたか何と思ふたか余は知らないが、兎に角見送りに來たのである。折角來たのに言葉掛けざるも何とやら、長男たる誠に、父ちゃんは戦争に行つて命がけの働きするぞ、御前は母ちゃんの言ふ事能く聞いて勉強してくれと言ひもあえず、汽笛諸共黒煙残してなつかしき第二の故郷と別れを告げた。

見送り人は鉄道沿線に沿ふて万歳の声天地も動せん許りにて、煙火の爆音と軍楽隊の囀鳴たる喇叭の音と相和して、国民の熱烈なる後援

は何れも御国の為に死の覚悟を一層強からしめた。国民の同情の和は又恐るべきものである。

何地もく、斯くの如くして送られて、午後十時三十分名古屋駅に着した。此処は亦恋しき吾が生まれ故郷にて、唯一人の母上と弟一人とは我が身を送らんと僅か十分許りの停車の裡に名残りを惜しみた。出発に当り軍人の母として言ふべき事にあらねども、女殊に昨年父上と別れたる母上にありては、唯一言次の如く、立派に働いてくれ、どうか一度は生きて帰ってくれと。是れを思えば親子の情愛の密の如きものあるを感じた。弟は喉も破れん許りの万歳の声をはり上げて我れを送ってくれたのである。実に此の時こそは、さすがに涙の自然と湧き出でて止むる事の出来ざりしは又人間も感情の動物なるか。汽車はゆれ出す、涙禁ずる能わず、余は直ちに「ウイスキー」をぐつと呑み干して笑ひにまぎらした。人前、殊に隊長の前をつくろうた心の苦しみは如何なりしか。後より思ふて茲に記すにも涙の種なりける。斯くて汽車は進行して、吾々は各地の歓迎を受けて、六日午前十時三十分大阪に着しぬ。

十月六日

大坂停車場到着後、直に停車場前広場に整列し、意気揚々隊伍整々と軍刀肩に輝かし、大阪市屈指の町を通過して、午後二時頃大坂西区中村雁二郎宅に宿営した。中村雁二郎は大坂名代の俳優にて、宅は広大にて下女下男若き俳優も可なり宅にゴロツキ居るので、是等を相手に晩さんに酒汲み替わしたのである。此家の女主人は元は芸者とかにて、已に年増のうば様なるも、中々に御めかしなされて腰巻きのひぢりめんをちらほらくとのめかされては、さすがの軍人も稍や女を思ふ心のいや増す許かり。併し若しも此処にて遊ばんか、三等症にも羅らんか、戦場にて目ざましき働きも出来ず不忠此上もなしと覚悟し

たる余は、主人の勧めにより浪花座なる中村雁二郎の芝居見物にと案内せられ、ほろよひ機嫌で車上の人となった。暫くして座にと着ひて一座を見渡せば、大坂の事とて芝居小屋はまるで女に満たされ、男は誰れも皆三人の花を召し連れて、さも愉快そうに笑ひ興じて居る。吾等は丁度二階の一隅にと陣を取り舞台を眺むれば、今や中村雁二郎が大高源吾の元禄快拳録仇討ちの場と知られる。実に戦さの首出に最先よし。是れ独逸は日清戦争後三国同盟を結び、日本を軽蔑して血税を以て購ひ得たる遼東半島を還付さしたのである。我に取りては仇敵なり。是を思ひ彼れを思ひ居る折りしも石川政元様の来訪となり、宿舎に帰って種々色々と四方山の話しをなして別れを告げた。此の際餞別として敷島十個を頂戴したのである。斯くて余は無事午後十二時、安き眠りに就いた。

十月七日

宿舎より餞別としてアルミニウムの鍋及び赤き朱塗りの御碗を受け、余は午前五時といふに中隊長と共に先発し、電車にて大坂築港埠頭に到着したのは午前六時三十分頃であった。是れより色々と人員乗船掛りとして勤務し、午前十時頃全く乗船を終わった。此の運送船は二千七百噸にて、船は小さきも足浪早く美麗な船であった。

大坂埠頭には愛国婦人会、芸妓団隊、其地方有志、又は出帆の景状見物にと出掛けたるもの、何れも国旗を手にしてさん橋に満たされた。吾等は直に甲板上に集合し、此等有志の見送りを受け、万歳の声諸共に船はゆれ出した。折りしも英国婦人二名、態々此の首出を見送りにて遠くくになる迄ハンカチを高く手にかざして振るのであった。実に彼の夫人は愛らしき姿に見えた。斯くして瀬戸内海の景色に見惚れ居る間に早や夕陽西山に傾き、夜の暗黒面の幕は吾等の視界を掩ふたのである。

十月八日

明くれば今日も好天気にて、朝日は地平線上に現はれ、門司関門の風景殊の外見事にて、軍艦、大小運送船、数多碇泊する中を汽笛の声と諸共に、遇ふ船毎に万歳を浴せられつつ愈々今日は玄海灘にと進み行く。余は動員下令後將校仲間にて心配したるは、將校として戦地に出るや大小砲銃弾の為にびく／＼せざるや、玄海灘にて船に酔ふて苦しき思ひをせざるや、是れのみ心配であつた。余は玄海灘の唯中に、一人甲板上に出て見てあれば、浪静かにして恰も畳を敷きたる如く。此海中の唯中に千鳥偶々見慣れざる小鳥の船を追ひつつ来たり羽を休めんとする有様、如何にも面白く感ぜられた。斯くする中にも玄海灘は早や中を過ぎて別に差したる事もなかりしは、余の幸運なりしか。是れを思へば戦地に出ればそんなに臆病な事もないと思う様になつた。

十月九日

最う船中も厭きにあきたる中に船は益々進行し、毎日食事の際信号として鳴らされる鐘の音、其の打ち方は耳にはいやに感じた。斯くて其日も暮れた。午後三時、増田大尉よりお守りを二枚貰ふた。

十月十日

此の日も天気晴朗にて波穏やかに、午前中は唯海洋の唯なかに何にも目に映ずるものとしてなく、黄海も其名の通り茶褐色に染めなしてあるを見るのみ。午後となれば山東の突角も見えたり。愈々戦地に赴きたる心地にこそはなりける。又今夜よりは真つ黒き紙にて掩ひ、光の漏れざる如くして航海したるは敵前近く進行したるを思はしむ。此夜七時三十分頃、漸く労山湾に到着して海岸近く碇泊した。

十月十一日

天気馬鹿に好く、内地より氣候温暖にして未だ夏盛里と思はれた

り。午前九時、愈々上陸開始せられた。而して第七〔六〕十七連隊の第二大隊は青島攻囲軍に参加する名譽の光榮を有したるに反し、第一、第三大隊及第三十四連隊は山東鉄道守備隊として派遣せらるゝ不運に落ち入りたるこそ哀れにも亦笑止なれ。折角勇み勇みたる心根も、一時にがつくと許り挫けたらん。

茲処に始めて支那人の家屋、風俗、苦力、驢馬、一輪車を見て奇妙なるものと思つた。上陸したるは労山湾の陰、労山の麓にて、屹立したる山は急峻にして恐らく内地には見られざるものであつた。記憶より思い浮べて其絵を拙筆ながら記さん。〔労山〕の字と挿画あり。その下に以下の文章あり

戦闘に参加するは歩67の第二大隊及び機関銃隊、歩三四の機関銃隊にて、他は凡て山東鉄道の守備になる事を聞いて喜ぶもあり勇むもあり悲しむもありたり。將校として山東守備となり先づ命だけは拾うたりと言うもありたり。

午後二時頃迄揚陸に掛り、其間に夏外套、糧食二日分を携帯せられた。内地出発の際、山東は労山嵐にて寒き処なりと聞かされたのが頭脳に残り居る為め、上陸の際襦袢は二枚着した。而も防寒用である為めと且つ天候良きのと海岸の砂地の為め実に熱い／＼。遂に一枚の襦袢を脱いだ。

支那人は不潔なるものと聞き及んだが、實際此の土地に上陸して一層支那人の不潔なるを感じた。之れは支那人の苦力が何百と使役せられて居るものが、我々の中食の済むと捨てたる罐詰を拾ひ、飯の残り物を貰うて喜ぶ。落ちて居る紙屑、空き瓶は拾う。何でも食ふ。実に日本の乞食よりも不潔なるに驚ひた。併し中には中々美麗にして居るものもあるが稀である。尚ほ珍らしきは一輪車である。中央に一輪の車ありて、それを前後に一人乃至二人の支那人が腰で梶を取りて挽

く。又驢馬に挽かせて行く。是れは支那には道路の悪しきと、何んな畑の中でも、道が狭くとも歩けるので、此の一輪車は支那人に取りては便利なるものである。是れを挽ひて行くとキーギー／＼と鳴るので余り良き感じはしない。

午後二時上陸地点を出発。一里許り隔てたる王哥庄の南端畑地に到着した。而して午後四時頃より天幕露営をなした。此日に行軍は僅か一里に過ぎないのであるが、携帯品と戦時武装と、土地の乾きたる為め塵のある時には閉口して辛らき行軍をした。此処にて二三人の落伍者も出来た。露営の際、日本活動写真師は金儲けの為に我々の露営の準備中を活動写真に撮ったのである。

支那人は又窃盗が上手である。他中隊の兵卒が、夏外套及び水筒雑囊を外に置き便所に入る間に之れを盗みて逃げて行つた。気が付いて追かけて漸く捨て、逃げたので取り戻す事が出来た。

内地で演習でもする時は、畑地にて少しにても荒せば大変な苦情を持ち込まれるが、支那にては其んな心配は要らない。畑へ入りても何でもない。此夕食の際は携帯口糧にて各個自炊の命令で副食物は罐詰であつた。早速畑に行きて大根、菜葉を引き抜き、大阪より貰い来たりたる鍋にて煮て食事をしたのである。而して午後七時頃寝りに就いた。昼間の暑さで苦しんで能く眠りに就いたが、夜間は一段と温度が降る為め非常に冷気を覚えた。午後十一時頃目が覚めると、ドーン／＼と砲声が聞えて、夜間の寂漠を破りて戦争の物凄き響が吾々に聞こえたのである。愈々明日は其戦地に向ふのである。臂鳴り肉躍るの感があつたが、昼間の疲れで亦もす／＼と眠りに就いたのである。午後十二時頃連隊から命令が来て、現つの間に其れを聞いた。

夜が白々／＼あけた。余の目も眠りから覚めたが、未だに昨夜と同じ様にドーン／＼と砲声を聞いた。午前五時頃炊事をなして朝食を終わ

り、弁当も作つた。而して行軍の準備をなした。昨日と同じく携帯品は中々多いのである。色々と工夫をして、従卒にも持たせたり自分も随分持つ計画をなして早々身支度をした。支那人は朝早くより自分の畑の芋とか菜葉を荒らされるを心配して取りに来て居つた。

十月十二日

午前六時三十分、露営地を徹し王哥庄南端に集合した。処が糧食縦列とか戦地へ送る被服彈藥のため、人馬の行き来が非常に多く、そのなかには輜重輪卒にて靴は已に破れて支那足袋を穿つあり、髪が、ひげが延びて垢にて顔は赤黒く、暑いため夏服のものが多し。又将校も夏外套を着し、肩章なしで輸送に従事する。実に苦勞の様子であつた。試に輪卒に次のことを聞いた。何処迄輸送をするかと聞けば、八里許りある張村の師団司令部のある処迄である。何日頃から此処へ来て居ると聞けば、最早二十日許り過ぎると。二十日許りにてあの見じめなる垢のつきたる顔を見るにつけ、其の苦勞が見えるのである。夜昼働らいて眠る隙が少ないと、是れから山を三つ越えなければならなと。此の時初めて輜重輪卒の御苦勞を心に感謝した。

地図で見れば、昨日の目に映じたるあの險峻な山を六里許り行軍するのである。吾々は冬服を着て夏服外套を着た。御まけに負担量は重し。困つたことと心配しながら午前七時、同地出發行軍をなしたが、途中は山を登る許りで、道路は工兵により修繕せられあるも、坂道にて且つ塵が立つ。これが為め非常に苦勞をして已に三四十分も行軍をして疲勞を來たした処が、何にを急ぐのであるか、先頭の歩度は早いので骨が折れた。殊に小生は袴が小さい。一時間過ぎても休憩をしない。兵卒の顔色は、汗流れ塵の為に実に汚い顔となつて、呼吸も激しくなりて疲勞の体見受けられた。一時間三十分も歩いて休憩をした。山道が登り道にて川もなく、偶まにあれば小流にて不潔である。

且つ戦地に付き生水を飲むことを厳禁した為め実に苦勞であつた。斯くして辛らい／＼行軍を続けた。

午後十二時三十分頃、山の登る途中にて中食をした。此れより前に二三人の落伍者を出した故、看護卒を残し又分隊長も残した。而して支那人に背囊を負はして連れて来たが、昼食前、山本純一なる兵卒が又も落伍した。余は叱咤して歩かした。処が可なり歩けるのである。是が為めシヤクにサワリ、且つ他の部下を激励する為め、昼食前に小隊の兵を集つめて猛烈に怒つた。彼の山本純一を例に出し、苟くも戦争に來たのである。誰れも辛らい。同じ事である。克己心が乏しい。倒れる迄歩かねばいらない。落伍した者は其場に人事不省に落ち入りに居るものが初めて眞の落伍者で、其他は皆横着である。余は小隊長として斬かる行為を許さない。それで若しも余の命令に従はざれば、余は携帯し居る軍刀にて先づ部下を斬らん。汝等もそれが不平ならば余の生命を断ちて後自由なる行動を取れ。余は達てには軍刀を持たない。君国の為め行動する上に於て障害を為すものあらば、敵味方の差別なく敵として戦ふのであると大言壮語、如何にも無人の有様にて激語して解散をして、而して部下の為に、持ち來たりたる鍋にて急ひで河水を汲み、湯を湧して水筒の湯の補充をした。漸く湯が湧いたと思へば已に集合の命令にて、漸にして水筒の湯は補充したのである。斯くの如く部下に残酷なる命令訓戒も与え行軍を続けた。幸ひに其後部下は落伍せずに済んだ。午後二時頃、山を登り詰めて柳樹台に到着した。此地は独逸の兵營があつて守備地らしかった。初めて独逸の建物を見たが、皆破壊せられてあつた。且つ日の丸の旗が立てられ、堀内支隊の占領と大きく書かれてあつた。是れからは独逸の租借地で、道路は自動車を通れる立派なもので、如何に独逸が山東經營に資金を投じたのか明瞭である。

午後二時三十分頃より支那部落の稍大きなものを通つた。此の際嬉しかったのは、支那人が李果(ナシ)を売るのである。余は支那語の片言にて李果(リー)有没有(ユーメーユー)とやらかしたら直に一個を我れに与えた。それで三個を二十錢出して買つた処が、其後兵卒は漸く李果を買ふ事を覚えた。処が支那人は日本の錢の価を知らない。五厘にても一個、一錢にても一個、二錢にても一個である。十錢にても一個である。此処に於て銅貨の必要を認めたが、飲料水の無きのと、戦争に行けば生命はないものと思ひ、金は価のあるものなにも構はない様になつた。我々も金に就いては一文の価値も認めなかつた。但だ用意の為め金は持つては居るが、全く其有りがた味を忘れた。斯くの如く中々面白く、午後三時頃張村の河原に着いた時、昼食前に伍落した山本純一は、余の命令通り行軍中倒れて人事不省に落込んだ。是に於て二三人を残して看護せしめた。目的地たる張村南方畑地に午後三時三十分到着した。天幕露營をした。此の張村は稍大きな部落であるが、皆土と石にて汚なく建てられ、室内は暗く、土間に一種異様な臭氣を放つた。何処の家でも斯くの如くである。師団參謀より次の注意があつた。

一、敵の飛行機は二三日前、張村の天空に出現し、師団司令部に向ひ爆彈を投下せり。幸ひにして爆彈は英国軍宿營地に落下したるものにて、一名も死傷者なしと。

二、此付近の支那人には独探多きを以て注意を要すると。

午後四時、宿營準備も終り露營の夢を結んだ。糧食は矢張り罐詰である。此後は特別に記さざる時の糧食は罐詰位と思はれたし。又微発して畑地より取る山東菜等である。山東菜は有名なるものにて、内地の白菜の如くで実に好味である。出征中及守備中は此の山東菜を毎日毎食食つたのである。(山東菜の挿画あり。その下に以下の説明あり)

株の大ききなるものは高さ七八寸、中径五寸位である。

師団命令により十三日は一日休養をなし、十四日愈々第一線の第四十八連隊と交代するのである事と、十三日には中隊長以上は第一線の交代地に於ける地形敵状の見学をする方が可ならんとの命令であった。此の夜は又々砲声盛んにして探照灯も時々光りを放ち、夜間我友軍の陣地に破烈する榴散弾を目撃した。敵の大砲は絶えず発射した。我軍は攻城砲の準備ならざる為め、十月二十七八日頃迄は総砲撃は開始せられず、唯だ海軍砲が遠距離より射撃を為すのみであった。

此の日李果を沢山に徴発して腹が一杯になった。実に美味であった。内地のより大きくて汁が多い。「ナシの挿画あり。以下に次の説明あり」此んな形のもの中々多い。

露営の為め、キビがら、芋の枯れ葉を天幕の中に敷きつめた。此の際、支那人が畑の芋蔓の中に匿してあつたアンペラ二枚を捜し出した。

十月十三日 晴

午前六時頃より敵の単葉飛行機、我露営地の頭上に現出したり。此の時、我飛行機も亦現出して敵の偵察を妨害する如く見受けられたり。我が隊は直に天幕の中に其姿を隠匿した。砲声は朝来猛烈にして、其の弾着も亦時に明瞭に見受けられたり。

第一線と交代の為め本日見学するのは大隊長以上なりしも、昨日の命令にては中隊長も亦第一線を見学する筈であつた。丁度中隊長は此日日直であつた為め、余は大隊へ行き、第一線に行く積りで出掛けしたが、皆は乗馬にて余のみ馬無き為め如何せんと思ひて居る内に、大隊長以上は已に馬上の人となり出掛けたのである。余は暫くして大隊の軍医の馬を借りて其後を追ふて出掛けたのであるが、追ひ付く事は出来なかつたが、兎に角行けるだけ行きて見んと馬を走らせた。約半里程前進したと思ふ頃、楊家屯といふ部落の入口の川原迄来た時に、我

頭上にて曳光弾の榴散弾三発破烈せり。此の時は別に何とも思はなかつた。併し楊家屯の部落の中へは中々弾丸が来るのである。この付近は丁度我砲兵の宿営地であつた。而も朝来飛行機にて偵察した許りであつた故、其部落に居残り居りたる支那人は皆逃げ出した。それ故余も亦前進を控へたが、此んな事では駄目であると楊家屯の部落に入らず道もなき川原を右に折れて前進して李村に着いたのである。其れから段々東へくと前進し河南に到着した。茲処には呑気に砲兵が馬の運動を為して居る。而も砲弾は時々落下するのである。尚勇を鼓して南の方へ七八百米前進したが、遂に道路が分らなくなつた。且つ乗馬は下手であり、腰も痛くなつた。前面千米位の高地には我歩兵隊も見受けられたるも、此付近にて砲弾を受けて戦死せんも犬死同様なりと考へ、馬首を転じて帰途に就いた。途中又々楊家屯付近にて砲弾の御見舞を受けたが、道を避けて落下する付近を僻けて、正午頃露営地に帰着した。斯く此日も絶え間なく敵は射撃を継続した。

十月十四日

愈々第一線に交代の日は来れり。午前六時より出発準備を整へ、支那人二名を連れ来たり。李果を五十錢にて二百許り買ひ求め、又アンペラ二枚其他炊事用食器等を担はせて、午前十時第八、第六、第五、第七中隊の順序に距離五百米を隔て、砲彈落着せざる迂回路を経て、大山西方谷地に午後四時到着した。途中支那人の惨殺せられあるもの数個を見た。頭や胴や手足が所々に飛んで居る。又犬が食ひたるらしく、実に悲惨の景況であつた。是れを見た吾々は一種異様の感に打たれた。是れが為め、雇ひ来たりたる支那人は早く帰へしてくれと頼んだ。大山に着した頃、金五十錢を与へ証明書を持たせて帰してやつた。殺されたる支那人は皆独探の嫌疑を受けたのである。此の大山西方谷地は敵の第一線より一里許り隔てたる処にて、大きな山の谷

間で河ともなり道路ともなり居る処にて、是れを工兵が修繕して道中も大きくなつて居る。此処には重砲兵及工兵大隊が宿営して居った。皆天幕又は応用材料にて敵弾を避くるため崖を中に切り込んで穴居して居る。吾々は此処に宿営する事となつた。それで第八中隊は此前方約二千米の四房山付近、第六中隊は此位置にて、第五中隊は予備隊、第七中隊は連隊の予備隊となつた。

第六中隊の一小隊は、第八中隊の右に韓家庄といふ処に小哨に出る事を命ぜられた。其処で敵偵察と露営地偵察の爲め、前方二五〇の高地に登りて敵方を見た処、実に驚ひたのは青島市街の半部は手に取る如く眠下に見下ろされ、敵の陣地及障害物及鉄条網及外壕も能く見えた。此の時外壕は白壁の如く直崖なるを知り、ベトンにて固めたるものと思ふた。

午後五時となるや第四十八連隊より伝令来たり。交代の爲め案内すると申来たりたり。余は一小隊を連れて行く事となつた。早速徹夜の準備として外套を着た。夏外套も亦着し、二日分の携帯口糧を持ち、其他は皆此の地に於て他の小隊のもの、世話を受ける事として出掛けした。高地に登りて見た時は非常に近く見えたが、扱て交代する時に案内せらるゝ道は、谷や川を利用したる交通路にて、迂面する為め里程は半里程あり、途中に日は暮れて眞の暗夜となつた。其上暑くて汗で濡れ等びシヨ濡れとなつて漸やく韓家庄に到着して、此処が昼間の位置で、夜間は此の前方二百米許りの処に居ると、案内者に連れられて夜間の位置に行つた。此際敵は探照燈を照らして砲弾を猛烈に浴せ掛けた。丁度此位置は大きな街道上であるから敵は目くら打ちに打つのであるらしい。余は探照燈を知る。亦砲弾は如何なるものであるかの理解力を持つ。処が部下は此の智識に乏しく、且つ敵の位置や地形が不案内、尚眞の暗夜で非常に恐怖の念を抱いたのである。

午後七時、漸やく其位置に到着した処、第四十八連隊の第六中隊は此処に三分隊を連れて来て居るので、散兵壕の正面中も少なく、部下を安全の地に置く能はず。為めに前の小哨の配布は、第一復哨は三人で第二下士哨は七人であるのを、余は第一下士哨を第二分隊、第二下士哨を第一分隊と決して、その位置に至り交代を終わる。

此の時、第二下士哨の位置にて申送りを受ける際、光と光^{ツツ}と思ふ間もなく其付近に火花を散らした。余は思はず伏せをなした。部下は丁度無理にも低くい処に伏せを為さしめた処で、幸ひに負傷者はなかった。斯くして第一、第二下士哨を配布して、各下士哨長に左右に連絡を取らしめたが、第一下士哨長は連絡を取りて、右は未だ交代を終らなかつた。左の第二下士哨長広瀬軍曹は、敵弾に恐れてか、三十米許り左に第八中隊の居るにも係らず、連絡出来ず、足関節を捻挫したとの報告であつた。

余は小哨の位置に帰つたが、残る兵隊は皆浅き壕にはり付いて物をも言はず、恐れて志気振はず。斯くてはならじと余は壕内に入らず、壕の外に出て勇氣を現はして部下の志気を鼓舞した。斯くする内、猛烈に砲弾を浴せ掛けられた。其中に光と光る間もなく異様な感じをした為め、直に壕内に飛入りたるに、余の後方五六米に砲弾爆破した。余が壕に入るのが遅かりせば一命危かりしならん。部下は皆小隊長は戦死したと思つた。余は亦其壕内にて夕食を始めたが、其時又々敵弾前面に落ち、飯盒の飯には土が入つた為めに飯を食ふのを止めた。

此の時、原田従卒と副従卒小堀卯作とは、余の許にありて前方を監視して居つた。余は看護卒と共に掩蓋の設けある穴に入つて、試に敵弾の発射数を数へしめたが、一時間七十乃至八十発であつた。午後九時頃迄に十米許り散兵壕を右の方に延ばしたが、土地堅くして中々掘開する事能はず、漸く五十珊知米も掘つて止めた。午後十二時頃、第

二下士哨より山崎上等兵来たり報告して曰く、神谷真一は歩哨服務中砲彈の爲め頭部に負傷し動く能はず。此の報告は負傷後已に一時間を経過し居れりと。広瀬軍曹は如何せしやと問ひたるに、神谷真一負傷後其任地を去り、右の方に三十米許り位置を変じて第一下士哨の方に至り、負傷者の処置もなさず。茲に於て神谷真一を後方に送致する目的にて、負傷者を小哨の位置に連れ帰へるものなきやと問ひたるに、誰れ一人として返事を爲すものなし。余は大に憤慨して起ち、余と共に行くものなきやと。此の時小塩卯作、星野寿一、山口善平の三名直に起つ。依而共に下士哨の位置に至る。途中二三発の砲彈を受け、之れを避けつ、其位置に至り、神谷真一を連れ帰る。途中又々砲彈を受け、二三回路傍の凹地に伏姿をなす。余は広瀬軍曹の不甲斐なきを詰り、神谷の装具、血痕の付き居る帽子等を持ち帰る。其後大隊の位置に送る爲め、佐藤伍長、市川梅次と五名をして後方約千五百米の医務室に送りたるは午前二時過ぎなりき。負傷者後送の骨の折れたるは亦格別なりしならむ。

十月十五日 曇後雨

午前四時頃、小哨の位置を引き揚げ、昼間の位置に來たる。此処は深き地隙にして、道路の下には水道ありて小隊の兵を入るゝに充分なりしなり。然るに午前九時頃より雨降り始め、暫くする中に水道の中に水の流れ來たり。敷きありたるコーラン等は濡れ始めれば、一同を外に出し、道路の右側に二個の掩蔽部を作り始めたも、雨猛烈となりたる爲め充分なる掩蔽部を作る事能ざりしも、砲彈と雨をしのぐには足る事の出來たものを作りあげた。此の時、池富上等兵（大石豊平、渡辺精一郎、植田千代吉）、久米田上等兵（山本純三、藤田常平、鈴木平吉）、右二組の斥候を前面に派遣し、敵状及地形の偵察を爲さしむ。共に勇敢に動作したるも敵は銃眼より射撃を爲し、爲めに渡辺精

一郎行衛不明となりたるも、其後久米田斥候と共に歸り來たり、何れも十分の報告なかりしが、恰ぼ地形を知るを得たり。

十五日夜も前夜と同じく警戒するのであるが、雨甚しきと前夜の位置は却而危険なりし爲め、前夜小哨の至りし地に一軒の小屋、道路の近傍にある爲め、茲に余の率ひる一分隊を入れ、前面には路上に潜伏斥候を出して、他は昼間の位置に置き、路上には樹枝を以て阻絶をなした。敵襲に対する処置を爲し警戒す。砲彈、探照燈の盛なること前日に異ならず。危険曰はん方なし。時々余の居る家の近傍にて砲彈破裂し、其彈子の散乱するを見たり。第六分隊長たる大石軍曹は曰く、此の家に砲彈の全彈當らむか、中尉殿と諸共であると覺悟を決めて警戒をなした。

翌日になりて發覺せし事なるも、此処に歩哨に立ちし古橋喜作の彈藥盒には砲彈の丸子入りありて、彈藥二発を破損せしめたる事あり。此の古橋こそ幸運兒なれ。十五日の一晚中危険の思ひと、歩哨を立てると、小哨長たる責任とを思ひ、一目も眠らなかつた。

十月十六日 雨

午前七時頃、昨夜火災のありたるため此の韓家庄の部落を見廻りたるに、一名の支那人大に余を歡迎して招く。爲めにその家屋に入りたるに、六七名の支那人集り居りて共に流涕し、目に涙をたゝへ居るにぞ。能く見れば庭に一つのコモ包みありて、その中より五六歳の小兒の手の先き見ゆるにぞ。さては昨夜の砲彈の爲めにやられたるものかと、哀れに惻隱の情禁ずる能はず。又其母は前臂及び額に負傷しありて血痕付きあり。痛むめき様子を見受けたる故、看護卒を呼び來たり縋帶をなし遣り、危険に付後方に避難する事を勤め、証明書を書き金五十錢を与へて歸り來たりたり。実に亡国の民たる支那人こそ可愛いそふなものはない。他国の戦争の爲めに家や土地を捨て避難し、其

跡はあらゆる道具・戸板等持ち出されて掩蔽部の材料又は薪の代りとなり、畑にある菜や芋は皆堀り取られ、而も毎日食事をもせずにあちらこちらと漂ふて、浮つかりすれば独探等と嫌疑を受け殺されたりするのは実に気の毒なるものである。

支那人の家に入りて暖を取り、昼食を為さんと支給せられたる味噌と牛肉にて味噌汁を作り掛けた。砲弾は絶えず此の韓家庄に落ちたが、雨降るのと寒さの爲めには仕方なく、小塩と原田と二人にて能く親切にして、漸く味噌汁も出来た。愈々食事せんと思ふ頃、鍋の底が抜けて味噌汁は皆火の中へと落ちたるにぞ。一面灰かぐらとなり、漸く底の縁に付き居る肉と菜にて食事を終つた。従卒等は灰の上に落ちた肉等取り上げて食事を爲したこそ笑止にも又遺憾であつた。此鍋は随分大きな鍋にて、瀬戸の素焼であつた為め破損したのである。実に戦地は失敗もあるし、又其れが中々面白くも感じた。

雨は未だ朝来より降り続くのである。午後五時三十分、西村小隊と交代して六時三十分頃中隊の位置に歸つたが、途中は此の前來た道は深き河となり居り膝迄没するのである。且つ道は泥濘にて深き処あり。余は途中深き処に入りて殆ど胸迄水の中に入った。斯くの如くして、折角支那人の家にて乾かした被服は亦スブ濡れとなつて中隊に歸つたが、中隊の幕舎は昨日より降り続きたる雨にて雨の洩る事甚しく、木炭は無き為め薪を燃せば煙許り立ちて目より涙が出る。併し前々日來の疲れもある為め、濡れた仮眠るでもなく醒るでもなく現つゝの中に其夜を徹したのである。身体は濡れざる処はなく、其心地の悪しき事生れてより始めてである。此間にも砲声止まず、蔭々として天地を動す。殊にチルチス、ビスマルクより打ち出す地雷榴弾は、天地一時に破裂する如く、百雷の一時に落ちたるに異ならず、心地善きものならず。二十八榴榴弾砲。

十月十七日 風雨、晴

午前八時頃迄は天候不穩にして風雨激しく、寒さ殊に加はりたり。余は始めての初陣にて、且つ二日間も安眠せざりしと、飲料水は河水の濁りたるものと、湿润の爲め、寒冒に罹り腹痛を始め、下痢さへ初めた。而も発熱して頭痛がしたのである。母上様手製のキナエンを伏し拝みて服用し、看護卒より健胃散を貰うて服用した。午前九時頃より天候稍快復したる故、幕舎の改造をなし、諸物品の乾燥をなし、自分分は食事はオカユ二食にて一日中幕舎にありて不快の日を暮した。

十月十八日 曇後雨

午後一時より、中隊全部と共に韓家庄南端に砲兵掩護陣地、即ち攻城第一攻撃陣地を構築する為め出發し、午後五時頃より陣地の偵察を爲し、午後六時頃より探照燈の許に砲弾及機関砲の射撃を冒して午後十二時頃迄作業を継続した。此土地は一般に平にして水流が多く、爲めに少し掘れば水が出て、散兵壕及交通壕は水の湧出するのと排水出来ざる爲泥土と混じ、工事の困難なりし事知るべきのみ。午前二時頃、斯の交通壕泥水の中を通りて中隊の位置に歸つた。雨は降り出し、着装被服は全部濡れて心地悪しきこと曰わん方なし。これが爲め、天幕の中にて燃えぬ薪木にて山東菜と肉にて慰勞の酒を飲み、其勢で漸く眠るのである。午前四時頃寢に就く。

十月十九日 雨

午前十時に起床。朝食午前十一時。本日、木炭始めて支給せらる。支給品は豊富にして食事に困る事なきも、漬物及煙草・菓子之欠乏は実に毎日吾人をして泣かしめたのである。酒・菓子之支給は三日に一度、煙草は五日に一度の予定にて支給せらるゝも充分ならず。酒保の設けなき爲め、此んな困つた事はなかつた。第一線へ出てから本日迄昼夜合して敵の砲弾は千二三発を下らず、所謂乱射の景況にあり。

十月二十日 晴

天候回復して一段と寒冷を覚ゆ。午前十時、加藤上等兵、小塩卯作を役使して後方約二里の李村に日用品及び煙草の調弁を為さしめたが、午後三時頃帰来して煙草に有りつく事が出来たのは嬉しかった。西村中尉の韓家庄より微発し来たりたる驢馬の鳴声は如何にも哀れにて、其れが又砲彈の音のする度に悲惨なる鳴声を為す。支那〔の〕動物は又亡国の動物らしくも思われた。

午後三時、中隊の全部整列して作業に出掛けた。第一小隊は作業後小哨を交代するのである。午後六時頃より例により作業を開始した。第一小隊は第一線にて、第二、第三小隊は中隊の掩蔽部及交通壕の構築を為した。午後九時五十分頃、敵の七八十名の者、我れに向て発射し、小銃弾我れに飛来す。茲に於て之れに応戦して之れを撃退す。射耗彈藥五百〇一発。第二、第三小隊は後刻第一線に増加したが、其の時迄に第一小隊は射撃を止めた。後刻酒井伍長及佐藤伍長をして第三中隊に連絡を取りたるに、第三中隊の服部中尉の先進部隊が工事を実施し居るのを襲撃せしもの、如く、第六中隊の射撃の為に撃退したとの事であった。

余は然らば敵の来襲した付近を搜索せば何にか良き情報を得んと、茲に第二分隊を率ひて先づ服部中尉の居る高地36に至る。此の山は敵が茲に位置せしとき、鹿砦を以て障害物としたため、前進否歩行も充分ならず。樹枝（トゲあり）にて顔を突き手を突き、足は踏み答えなき処を無理に通過して、漸く服部中尉の許に至る。服部中尉は山蔭に身を潜めて居ったが、今は最やられたかと思つた位に弾が来た、確か七八十名の敵前進したるものらし、敵は近き故進出するは危険である、又此地に吾々の居るを偵知せられては将来の工事に困難なれば、偵察するのは翌日にくれとの事であった故、余も又之れを諒とし

て帰途に就いた。二十米も高地を降つたと思ふ頃、小銃弾・機関砲彈の猛烈なる射撃に遇ひ、一分隊と余は地上に伏したるも、鹿砦ある為め身体樹上に浮き上がり居りて危険なり。余は直ちにピストルと刀の柄を頭部に当て、掩護した。兵卒には銃の床尾鋏部を頭に当てる事を命じた。小銃弾はぶすぶすと身近に落ちるので、愈々此処に戦死をするのであるかと覚悟をした。幸ひなるかな敵の銃砲彈一時止みたる間を利用して帰へろうとしたが、五六歩過ぎた頃又々射撃を受けたが、暫くして射撃を為さざるに至つた故、漸く中隊の位置に歸へる事を得た。中隊長始め部下一同は、余の身と一分隊の身を氣付かつていたのである。

十月二十一日 晴

午前六時、敵情を視察す。双眼鏡不具合の爲め充分なる視察を為す能はず。佐藤伍長に卒二名を付し、昨夜の位置を搜索せしむ。異状なし。

十月二十二日

本朝来発熱甚しく、終日不快にしてキナエン及び撒曹を服用す。例により第一線散兵壕の補修工事を為す。其工事は散兵壕内及其後方水流の排水設備にあり。然れども土地平らにして、却て水の流るゝ水道の方高くて、尚水湧出する爲め工事進捗せず。午後十一時頃、工事を終り中隊に歸へる（西村小隊と交代す）。十月二十日、二十一日は小哨に服務したるも、身体不快にして、寒く熱ある爲め、夜中になれば韓家庄の不潔なる道路の近傍の家に入りて、小塩・原田の従卒と共に敵方に火の見えぬ様にして焚火をして暖を取った。

十月二十三日 晴後雨

本日は中隊長〔註 小隊長〕竹田少尉のみ工事の爲め韓家庄に至る。余は終日中隊幕舎に伏臥す。当夜襦袢二枚、チョッキ二枚、外套、夏

外套を着て寝に就く。夜に入りて雨降りて、絨衣を湿す事甚し。又葉の効力現れしか発汗す。余は次の事を耳にした。二十二日夜、余が小哨を交代して終りたる其夜、余が何時も暖を取る為めに入りし家屋は一発の砲弾の為に三軒同時に破壊せられ、火災を起したとの事である。一日違ひにて此の災厄を免れたのは実に幸運児である。

余は、実に感冒と腹痛、然も下痢を為し、毎日殆どオカユを一合五勺位食するのみで、併も午後一時頃より夜中の二時頃迄水気多き土地に作業をしたのである。平時なりせば大病人にて、一週間位は休暇を願ふのである。余は心竊かに次の如く考へた。余は病氣であるとは人には話さない。其れは、戦争がいやで恐ろしいから病と称するのどと人に誤解せらるゝのが辛かった、又作業中倒れなば、之れは自分の任務の為に倒れたので恥辱にはならんと考へたからである。第六分隊長たる広瀬軍曹は、足を少し捻挫したが知らむが見た処では何でもなかったが、十六日以来常に中隊に残りて、各兵卒からは御留守居役といふ綽名を貰ふたのである。

十月二十四日 晴

午前九時頃迄雨降る。本日は稍快方に向ひ、土気旺盛となる。此頃の支給品は高野豆腐(余はキライ)、味噌、カンピョウも缶詰肉にして偶々生肉を支給せらる。本日留守宅より手紙到着す。取る手遅しと開封して読むだが、嬉しさの余りか悲しさの余りか、心で泣いてく感謝した。且つ最愛の子供の事を思ひ出して一度顔が見たくもなかった。併し其場の中隊長竹田少尉も居つた。自然と涙が出て来るには閉口をした。覺られざる如く泣いたは辛かった。此の手紙は破棄してしまつたが惜しい事をした。送りくれた御守護は、手つから上衣のポケットに縫ひつけた。

今夜も亦工事の為め出務す。砲弾、光弾、探照燈はかなり猛烈で

あつた。此の頃は火分光弾や探照燈に慣れて来て、少し横着になつた。此日は亦全身綿の如く疲労して、足は棒の如く、発熱、頭痛して困つた。之れを口にも顔にも出さず、余は働らひた。是れ勅諭の御精神と、且つは卑怯の名前を受けざるの爲めであつた。本日午後二時、連隊命令により一等給(十月十日付)に昇進したる知らせを受けた。

十月二十五日 晴

本日も亦午後二時より三分隊を指揮して工事に出場す。途中大隊本部に立寄り俸給十六圓三十一銭を受領した。

午後六時頃には何時も敵は弾を送らない故工事をする。始めは何時も六時頃からである。而し第一線散兵壕の左翼の道路を掘り割り、排水の設備を為し、工兵と協力して掩蔽部を作つた。夜中十二時頃に此の工事を止めて引き揚げた。此の引き揚げの際、福尾分隊長は、交通壕は水深き為め交通壕の外を歩いても可なるやと尋ねたる故、余は大に叱咤して曰く、交通壕内の水の深き処をザブ／＼と歩けと命令をした。実に幸運なるかな交通壕内に入りて帰へる途中、探照燈が照すかと思ふや否や猛烈なる機関銃の射撃を受けた。而して丸は其身辺に落ちた。丁度此の際、余は交通壕の外にありたる為め直に交通壕内に飛び込んだ。其動作の機敏なりし事は自分ながら不思議であつた。此の引き揚げの際、部下を水の中へ入れるのは可愛そうだと思ひ交通壕の外を歩かしたならば、五六名の負傷者は出来たのである。

中隊の位置に帰へりてより分隊長を集め大に訓戒をし、又兵卒にも戦地へ来たなら小隊長の言ふ事は親よりも有り難いと思ふて能く命令通り実行せよと訓戒した。是れ迄に余は危険なる目に遭遇したのは五六回である。実に危険／＼油断大敵なり。大に警戒を要すると思ふた。

十月二十六日

竹田小哨より歩哨線を通したる支那人(青島より来たりたるもの)

を送付し来たりたるものを、中隊にて通訳と共に中隊位置に於て調査をなす事三時間。遂に彼れの生命は余に一任された。本日、竹田小隊と小哨交代の爲め、午後二時頃より韓家庄に至る。此の時、連れ行きたる支那人は竹田少尉に頼むで処置をした。

十月二十七日 曇後雨

午前九時より午後二時に至る間工事を実施す。午後一時頃、第一線後方雑木の中に山雉子の下りたるを見て、梅原菊蔵の銃を借りて之れを射撃す。中隊に之れを送り、交代後酒の肴となす。好味く。先日來より病氣たりし余は、此日頃迄に何時となく全く快復した。

十月二十八日 曇

大隊命令により中隊全部第一線韓家庄の線に移る事となつた。是れは吾々に取りては大喜びである。去る十八日、工事を始める時より之れを希望したのである。何故なれば、大山から韓家庄迄は殆ぼ一里ある。そうして其道は泥濘にして且つ雨降れば河となり、夜の十二時頃迄作業をして帰へれば何時も眠るのは朝の四時頃で、又翌日は午後二時頃から作業に出掛ける。而も二日宛は第一線にて殆ど眠らず、小哨長となりて警戒を為すのが真に辛らかつた。本夜、工兵小隊と協力して、第八中隊の右翼の交通壕より第一線の前方に工事をなす。此工事は、攻囲線推進準備の交通壕で、敵前約六七百米、且つ前方は全く平坦にして地物の利用するものなく、全く敵の有効射撃下にあるので、大に警戒して作業に従事したが、天祐なるかな本夜に限り敵は探照燈も光弾も又射撃もなさず、工事の進捗は容易なりしなり。併し此処も第一線と同じく少し掘れば水が湧き出て排水すべき手段もなく、壕の中は膝を没する深き水壕と變る事なかつた。午後十一時中隊の位置に歸つた。中隊の位置は道路の下に穴を掘りて、其上に戸板等を乗せた六畳敷位の広さであつた。此処で火を焚く事は出来ない。又炭も支給

せられず、仕方なくローソク一本で明りを取り、且つ水筒の酒をローソクの熱によりカンをなして将校は酒を汲みかはした。

敵の砲弾は絶えず乱射された。悲しき哉天候の險惡の爲め、我が軍の攻城砲の据付け出来ざる爲め、総砲撃は二十八日頃と決して居つたのが延びてく我軍大に士氣粗そして居る。攻城砲兵は毎日六貫目以上もある砲弾を二個位背負ふて、一里も後方から交通壕を経て運ぶのである。砲兵の語る處に依れば三十日頃より砲撃開始せらるゝ様子で、若しも砲撃開始せば直に敵を震害せしめて直に開城せしむる等と砲兵の意氣巻は盛なものである。

十月廿九日 晴

午後一時より中隊掩蔽部及び交通壕を堅固にする爲め補修工事をなす。兵卒も此頃は大部分砲弾に慣れて、近辺に落ちて驚かぬ様になつた。亦敵から見えても構はんで作業する様になつたから、敵の時々我れに向て狙撃する其音は異様に聞こえた。ペントンくくと聞えた。時々我陣地に落ちることがあつた。午後五時より第二小隊と交代して小哨の位置に就いた。下士哨として広瀬軍曹以下七名を台東鎮に通ずる道路上〔の〕橋の下に出した。小哨の兵卒は道路の下を通ずる水道の中へ入れた。此処は砲弾の全弾来るも安全であつた。午後七時、第一潜伏斥候配置の爲め、第一線右翼の右前方約百二十米付近の地隙に至りしに、第四中隊長林中尉及其他將校の陣地偵察するのに遭遇した。而して林中尉より、此辺には地雷火があるらしひから氣を付け給へと注意を受けた。而して別れた。暫らく地隙を歩く中、余の足先きに掛かりしものありたるにより静かに注意して調べたるに、豈に計らんや是れぞ地雷火の銅線であつた。地雷火の設置〔ここに地雷の設置状況を記した挿画あり〕。其処で伝令に連れ行きし星野寿一をして之れを掘らしめた。彼れは余の旧従卒であつて勇敢なる男であつた。経

駿もなき地雷火を手で掘り始めた故、余は小円匙を持ち来たり掘る事を命じた。而して遂に掘り出して仕舞った。其間余は其傍に見がてら注意をして其掘開をさしたのであった。実に危険物であつた。而して潜伏斥候を其付近へ置き帰へりて原田与茂助及小塩卯作の兩名をして地雷火の運搬を命じたのである。此の時、敵の探照燈は猛烈になつた。又光弾もなげるのである。光弾には色々種類がある。矢張り鉄砲より打出したる煙火等と同様であつて、白きあり赤きあり青きあり実に美麗であるが、又其火花が空中にある間は其下面は昼よりも明白となるのである。其隙間を利用して運搬して来る事を命じた。佐藤伍長をして監督せしめた。地雷火を運搬して小哨の位置に持ち帰り報告して曰く、又々一つの地雷を発見しましたと。茲に於て再び掘らしめて、前記の四名にて遂に運搬したのである。午後七時四十分頃、第二潜伏斥候を中隊の前面に、第三潜伏斥候〔を〕中隊の左翼前道路上に配布した。敵の機関銃は能く此の道路を射撃するので、道路の左側の低き処を行進して潜伏斥候を連れて行つた。其時、斜右前方より猛烈なる機関銃の射撃を受けた。実に心地悪いもので、皆は其地に伏せをなした。其破裂する音はボンポコンボンと火花を散らすのである。夫れ故我軍にては之れを機関銃と曰はずボンボン銃と名を付けた。

午後八時頃より午前五時頃迄敵は我が陣地付近に野砲及ボンポンを以て徹夜して射撃した。我れに死傷はなかつたが、心骸せしめた。此夜、我飛行機は敵地に向て偵察と脅威の爲め出掛けた。月光々として天空にあり。飛行機の正体は目に入らざるも、其進行の音は砲声と相和してブーブーと聞えた。丁度其時、大隊より我飛行機は敵地に向て偵察に出掛けた通知に接した。

十月三十日 晴

午前八時、昨夜掘り取りたる地雷火を中隊の位置に運び、中隊より

大隊に之れを送付して報告をなした。大隊にては之れを工兵をして中を調査せしめたるに、一個の中にダイナマイト四十円許りの価値のもの填充しありたる事を発見し、尚有効であつた事は通報せられた。

午前中、時々砲弾及ボンボン、時にはペントンと小銃の射撃を受けた。此の日、我海軍砲は敵のイルチス砲台及青島市街を砲撃した。中隊の位置は敵の大砲と味方の砲兵陣地との中間である故、常に頭上を同じ様な音をして飛ぶのである。近きはシュー、遠きはビュー、又最も近きはグラフ／＼と鳴りを生じて飛ぶのである。午後五時、第一線小哨を西村小隊と交代す。午後八時迄第一線散兵壕及排水の工事を施行した。

十月三十一日 晴

天長節!!

我々の毎日期待しつゝ、ありし総砲撃は、本日午前六時より開始せられた。余は昨夜之疲れの爲め午前七時頃ふと目が覺めた。すると何時もの砲声とは少し異なり、又其砲声は大にして、且つ砲弾の鳴りは余り聞えず変であると思ふた。又本日は天長節であるから皇礼砲の代りに実弾の皇礼砲を敵に見舞ふのであるといふ様な考えも前つから将校仲間て話した事もあつた。穴から出て見れば、中隊の各兵卒は皆顔を交通壕より出して、盛んに士氣に満ちて敵陣を見て居るのであると。

余も一寸小高き支那の台地に登りて敵陣を見れば、我全砲兵は各任務に従ひ敵の凡而の陣地を砲撃するので、敵は偶々射撃するも其砲声は我砲兵の射撃の爲めに打ち消されてしまふ。午前中は、敵の砲台目掛けて打つので陣地に命中するのが能く見える。或時は敵の煉瓦の構築物を破壊して赤く爆塵の上るを見る。斯くの如くして敵は全く沈黙して射撃せざる様になった。何処でも彼処でも我将卒は満面笑を浮べてまるで戦争の活動写真を見る様な氣になった。

最も愉快を感じたるのは、午前八時頃、敵の石油タンクに砲弾の爲め火災を起したのである。初めは少し火燃が登ったと見る間に黒煙濛々として天に登る。此日は風もなく静かな清き日であった。黒煙は真直に上へ／＼と登りた。是れを称して黒煙天に冲すと云ふのであろう。斯くして登る煙は高き空にて広く拡がりたり。斯くする内、石油タンクの他のものに延焼した。斯くて空は黒煙にて掩はれ、爲めに天日暗く夕方の暮色蒼然たる思ひあらしめた。午後三時頃よりは、我砲兵敵の第一線歩兵陣地に向て射撃を開始した。中々能く命中し、敵の陣地は其線は明瞭になり、陣地付近の山は蜂の巣の如く山の形が少し変った位に能く命中した。又陣地前の鉄条網に命令して一部が破壊せられたのも明瞭に見ゆるのである。夜間も亦我砲撃盛んにして、斯く砲撃せられては敵は今にも白旗を揚げはせまいかと、吾々歩兵は心配したのである。此日、徹宵射撃の中絶する事なく、石油タンクは午後の九時頃になつても未だ沈火せなかつた。此んな愉快で且つ心地の良い日はなかつた。

十一月一日 晴

我軍の砲撃は前日に異らざるも、敵は亦早朝より我れに応戦した。我飛行機は、昨日砲撃したる結果偵察の爲め、敵陣地上に飛行した。又後方師団司令部の位置には繫留気球も挙げられて、砲の威力は偵察せられた。石油タンクは昨日より引き続き火災を起して炎々燃え上るのである。

午前八時より、余は一小隊を率ひて昨日第五、第八中隊にて構築したる交通壕の補修工事に出掛けた。此の地は敵より四五百米にして、交通壕の水深きと、又浅きため敵から能く見られるのと、補修工事は中々困難であつたが、どうにかこうにかして交通壕の積土を高くしたが、午前十一時頃となり我砲弾の破片が時々来たり、敵が又奇妙なる

砲弾を我作業部隊に送つたのみならず、小銃弾もかなり送つて来た爲め、工事は大抵出来たからつまらぬ死傷者を作りては遺憾と思ひ中隊に歸へつて来た。此の時工兵の小隊長も交通壕に来たり。敵陣地を見んと蝸牛双眼鏡を出して見て居つたが、小隊の歸へる時、危険と思ふて早く歸つて行つた。午後五時、第一線と小哨を交代して列の如く配備を終わる。第二、第三小隊は中隊長の指揮の許に中間陣地の工事をなす。

午後十一時頃、第七中隊の曹長余の許に来たり。第一大隊の第三中隊は何れにありやと尋ねたり。余は三六高地を教へ、何にかあるかと尋ねたるに、連隊長は、敵の中央堡壘は已に第四十八連隊の爲めに奪取せられたるものゝ如し、右翼隊は直に作業を中止し、攻撃準備をなすべしと。是に於て余は公然の命令を受けざるも、兵卒を集め其準備を為さんとす。折りしも大隊長より命令あり。今より攻撃準備、山田中尉は一小隊を率ひて余の許に來れと。余は其攻撃準備は如何にするや、中隊は如何なる命令を受けしや不明なりしを以て、伝令一名を連れ大隊長の許に至る。此の地は四房山の山蔭にて第八中隊の位置なり。此処には已に連隊長、大隊長、増田大尉もあり。余は此処にて、大隊長の命令によりポンプ街付近の敵情偵察を命ぜられた。余は直に小隊の位置に歸へり、久米田上等兵、加藤教一郎、杉浦光一郎、星野寿一、小塩卯作、毛受常吉を連れて韓家庄の南端よりポンプ街に向つた。此の時、中央隊の方では盛に銃砲聲を聞く。敵も亦我中央隊方面に射撃を爲した。

ポンプ街の前面は光弾を盛に発射した。敵は、此夜夜襲あるものと偵察したらしかった。光弾を発射せられると伏姿をなし、其隙を利用してポンプ街に漸次接近した。此処には小銃と鉄線を付け、足に掛かりて結ばるゝ様にワナが作つてある。而して前に倒るれば先きを尖が

らしたる小杭にて負傷する如く巧妙なる障害物があつた。兵卒は地雷火があるのではないかと鉄線を調べて居る。余は隅には地雷があるかも知れんが、此れは唯足を引掛ける障害物に過ぎないと兵卒に教へて、偵察を急いだのである。而してボンブ街の五十米許り前に来て見れば、其堆土の上より五六名我等に向て射撃をした。二十九高地の東斜面には機関銃二銃ありて、盛んに東の方に射撃をして居った。而し〔て〕ボンブ街には十五六名の敵が居るのみと思ふたが、鉄条網にて取り囲みありて、此障害を越えて尚ほ前進する事は出来なかつた。且つ任務は連隊の夜襲をする為め出されたのであるから早く帰る必要があつた。のみならず味方の砲弾はボンブ街の前後に落着し、榴散弾は我頭上に破裂し、危険曰はん方なし。余は敢えて帰途に就いた。敵は我等の帰るのを見て射撃をした。其時、久米田上等兵は中尉殿の身に間違ひあつてはいけない、私が身代りになりましよう。余は之れを断つたけれども聞き入れず、帰る間余の背後に就きて余の身体を掩ふていてくれたのである。此の久米田上等兵は戦役中常に勇敢であつて、且つ伶俐なる良き人物であつた。余は帰へりて報告した。此夜は、唯第四十八連隊の一小部隊が敵の陣地迄行つて何にか働らいたのが、間違つて誤り伝へられたことが明瞭となつた。

午前一時三十分、夜襲は取り止められ、又々元の位置に帰へる。連隊長曰く、善き演習になつた。警急集合の予習が出来たといつて帰へらる。此の時は實際無計画なる夜襲であつた。若しも此の際夜襲を実行せんか、大部は損害を受け、而も敵の陣地の占領は覚束なかりしならむ。又余の外に将校斥候は二組出されたが、無理なる命令であつて、且つ砲兵には此の将校斥候が出るから射撃を一時見合せとの連絡もしない。実に小隊長は残酷なるものである。

十一月二日 曇夜雨

此日も朝来より我砲撃は開始せられ、敵も亦可なり応戦をした。正午頃中隊の命令は次の如くであつた。中隊は本日より第一中間陣地に移る。第二、第三小隊は此陣地の掩蔽部材料を取り除き、其材料を用して第一中間陣地に掩蔽部を作る事を命ぜられ、第一小隊は海泊河の左岸百米許り北に陣地を構築する命令を受けた。兵卒の背囊、将校行李は、唯一部の掩蔽部に格納して監視兵を残して前進する事となつた。各小隊とも愈々其準備をなした。余は各分隊長を集め、必要な命令と注意を与へ、午後三時より各分隊長をして二十五米の繩に白布を付せしめ、夜間経始線を標示する準備を為さしめた。午後四時三十分、中隊の位置を出発。大隊より配当せられたる駄載器具は、円匙六九、十字鍬十二、鶴嘴六を各自に携持せしめ、土囊二千個を受領した。先づ各分隊長を連れ経始に出掛けた。残りは古參上等の引率にて各分隊毎に土囊を運搬して、先づ中隊の中間陣地付近迄持ち來たる事を命じた。余は、交通壕を通過して行けば安全であるが、壕の中は水深く甚しきは腹部迄及ぶので、且つ早く経始を為す必要があつた為め、分隊長も同様地形を利用して出進した。而して命令の位置に来て見れば、海泊河の左岸に堤防ありて右の方は其堤防にて射撃は出来ぬから、一層の事、命令よりは五十米許りは出るが、此の堤防を利用する考へにて経始をなした。小隊の右半分は稍右方を下げて、堤防利用せずボンブ街の右端に向ふ如くして、分隊長に其作業区域を配当して帰へり、中隊長を捜して報告せんとしたが少しも見当たらず、約三十分も尋ねく／＼と漸く見出したから此れを報告した。処が第八中隊は何処に作業するやと調べたるに、百五十米も後方で命令よりも余程後ろの方である故、其れでは連絡が出来て居らぬといふので、中隊長の計らひにより第八中隊を百米許り前に進め、余の小隊を五十米許り後ろ

に下げた。

そこで再び経始を初めたが、小隊の兵は已に工事に着手して居った分隊もあつた。其れを途中にて止めて再び経始を為し、分隊を其位置に就けた。此の位置は正面の敵より四百米位の距離であるが、海岸堡壘には二百米の直距離にて、ポンプ街とは殆ど同線で、斜射を受ける事は猛烈なる位置であつた。余は特に機敏に働らひた。而も此夜は中々沈着して居った。幸ひ、敵は光弾は時々発射するも射撃を為なかつたのは、小隊の為に幸運であつた。斯くて小隊は工事を始めた。右半部は平地にして水が湧き出る。左半部は山にして岩石多く、工事は何れも困難であつた。余は先づ一安心と、午後九時頃漸く夕食を初めた。此の時敵は海岸砲壘及台東鎮の砲壘よりも小銃弾及機関銃弾を浴せかけたが、小隊は已に壕を稍深く掘開した頃で、損害は受けなかつた。第五中隊は、船田大尉指揮の許に第六中隊の中間陣地と此の第二攻撃陣地との間に交通壕を付けるのであるが、交通壕は電光形又は矩形形に就けるので、其掘開距離が三百米以上も延びて大分閉口して居った。

午後十時頃、例の臆病なる広瀬軍曹より報告があつた。それは右の方には敵が一小隊許り散開して我れに対して居るとの事で、余は間違へて居ると思つたが行つて見た。何にもない。丁度此の時、敵はポンプ街より光弾を発射した故、広瀬軍曹に前面を見る何も居らないではないかと言ふて居る間に、広瀬軍曹は最も深き泥水の散兵壕の中に飛び込むので、付近の兵卒は笑つて居った。広瀬軍曹は始め敵が来たと思ふてから、部下には作業を中止せしめ、散兵線に銃を持たして就かしめて居つたのである。是れが為め、右の方は充分なる作業が出来て居らなかつたから、余は大に立腹して刀の鞘にて彼れの頭を打つたのである。

午後十一時頃、稍堅固なる散兵壕を殆ど完成するに至つたが、風漸く強く、雨さえ降り来たりて寒さ厳しくなつて来た。余は外套の上に兵卒の天幕を借りて被つて居った。此の頃より敵の砲弾は稍や猛烈を加えて来た。右翼の方には第四中隊が交通壕を掘開して居った。丁度其処へ敵の砲弾が猛烈に爆破するので、是れは非常なる損害であると思ふて居った。漸次其砲弾は我が後方の中隊の陣地の前後に落ち、此の小隊の付近へも落着し始めた。確か敵は三門で同時に斉発するので、其着弾して爆破するや土煙が二十米も高く揚がるのと、其震動は非常なるものであつた。併かも中隊の位置には大分猛烈に着弾するのであつた。第五中隊の船田大尉、松山中尉は交通壕を半分作りにして作業を中止にして歸つた。余はそれから一時間許り作業した後、各分隊長を集め、作業は止めにするが今敵より射撃する砲弾は中隊の陣地付近に猛烈に落ちるから、中隊の位置に歸らず此の地に居つた方が却而安全と思ふが如何にすると問ふた。分隊長等は、此時已に後方中隊の位置には掩蔽部が出来て居る事を承知して居つた為めか、どうせ死ぬならば中隊長の許にて諸共死なんといふ意見の許に歸へる事にした。余は、それで〔は〕今夜は小隊長が先きに歸へる。其れは中隊へ先きへ到着して、第一小隊の入るべき掩蔽部の配当を受ける為である。何時も工事に出る時は小隊長が先頭で、歸へる時は小隊長が後尾であつた。斯くて歸へる準備をなして、水のある交通壕の中に入りたり。又は交通壕の出来居らざる処は外に出て高き処を歩いた。丁度中隊の位置迄二三十米であると思ふ頃、俄然敵の砲弾三発、余の十米許り前に交通壕の右と左に落ちた。余も兵卒も驚いて、一時自然に其処に直立した。余、心の内にて今晚は危ないと思ふた。そして漸く中隊の位置に至り、兵卒全部を薄弱なる掩蔽部の中へ無理にも入れたが、雨は自然と洩るのである。余は、中隊の将校の穴室に入りて報告

〔を〕なした。此の時、竹田少尉は今晩は中隊將校一同一つ穴にありては全滅の恐れありとて兵卒の方へ入って居るといふ事を聞いた。而し西村中尉も亦大に心配をして居った。余は詮方なく此の狭き穴にて寝たが、猛烈なる砲弾は絶えず我陣地を襲たのである。

十一月三日 雨

朝起ると雨が降り続いて居った。此の土地は深く掘れば水が湧くので深くは掘れないために、掩蓋には少しの土外積めない。且つ材料が良くないので雨が洩るのみならず、土の塊が落ちて来るので如何ともする事能はず、此穴の中に兵隊の天幕を張った。

午後一時三十分、昼食を終りたるに大便に行きたくなかった。此処は敵より能く見えるので、少しでも頭を出せば直ぐ狙撃をせられる。藪崎彦太郎といふ兵卒は廁に行きて弾丸命中して負傷した。又此処には未だ便所が作つてなかつた。仕方がないから円匙を持ち行きて交通壕の土の積んである蔭に穴を掘り大便を為したが、大便中風が強くて帽子が飛んで交通壕の泥水の中に落ちた。大便もそこ〳〵にして止めて帽子を拾ったが、泥が一面に付いて帽子も不潔になった。中隊長が「対陣や 便所に行くも 命懸け」とコネクリたも又其筈である。実に危険なる陣地であつた。我友軍の砲兵は稍射撃が緩慢となつて来た。是れに反して敵の砲声は優勢となつた。平時友軍の砲撃は味方の士気を旺盛ならしむると聞いて居ったが実にその通りである。

午後三時頃、第四中隊將校村櫛氏来たり、我中隊及第八中隊の情況を聞き、第四中隊の情況を通報し連絡す。此の夜、第四中隊はポンプ街付近に散兵壕及交通壕を掘開する事であつた。午後三時三十分頃、大隊より命令ありて、掩蔽部の材料を配当せられたるを曹長報告し来たりて、本夜の作業、第二攻撃陣地に使用するのである。中隊長は何にも曰はなかつたが、余は進んで昨夜の位置に掩蔽部を構築する事を

申出で、各分隊より四名宛出し、曹長の指揮を受けしめ材料の整理と運搬を命じた。此の時、大石軍曹及佐藤伍長の二名を使用した。広瀬軍曹は又も胸が痛み呼吸困難であると申して、遂に此日作業に出でず涙を流して居つたとひふ事である。余は広瀬軍曹の臆病なるを思ひ、却而作業に行かざる方が良いと思ひ、其俣に過ごした。午後六時頃より作業に着手し、昨夜の右半分は土地低くして掩蔽部の構築充分ならず、左翼に新たに三十米を延ばした。此処は非常に岩石地にて掘開に困難した。而も材料運搬の為に第一小隊は二十六名を使用して居るのである。第二小隊は、昨日余の経始した海泊河の左岸の堤防を利用して掘坑散兵壕を作り、午後十二時頃作業を終り歸つたのである。第一小隊は、工事困難にして、且つ全部運搬し終りたるは午前二時頃であつた。小隊の入るべき穴を五人して掘開せしめたが、午後九時より午前二時迄掛かつて漸く一米五〇許りの深さの小さな壕を掘るに過ぎなかつた。余も寒い為めに手伝つて工事をなした。午後九時頃、敵は猛烈に射撃を始めた、而も第四中隊の交通壕を作る処へ猛烈に落ち、此際、第四中隊は村櫛少尉以下三十名許り死傷をしたのだと後で聞いた。余は午前四時、全部の工事を仕上げた故中隊の位置に歸へると狭い。且つ第八中隊に三十米許り掩蔽部を譲りやつたといふ事を聞いたので、中隊長に報告して第一小隊は此の第二攻撃陣地に位置して歸へらぬ事をいふた。中隊長も承知した。是が為め、厭な交通壕を歩く事はなくなつたが、食事には苦勞をした。此の日天気一変して東北風吹き荒び、非常に寒氣を増して足先冷えて眠る事能はず、火の氣は一つもないが、疲勞の為め知らず〳〵眠りに就いた。

十一月四日 晴

兵卒は疲勞したと見えて覺むるものは少なく、余は八時頃に起きた。午前九時頃、兵卒はボツ〳〵目を醒した。余は朝早く敵情を見る

為めに穴より出たが、敵より一発の小銃弾がペントンの音と共に飛んで来たから一寸見上げた処、壕が浅いために余の胸より上は敵より能く見られて居るのであった。驚いて姿勢を低くした。此の陣地は中隊の中間陣地より稍離れて居ると、土地が岩石であるため、充分なる交通壕が出来て居らぬ為め、食事を取りに行くには日暮れでなければ困難である。是れから食事は夕食と朝食と昼食の三食を受ける事にしたが、夕食は作業前に食し、午前二時頃作業して帰れば腹がすぐ為め、翌日の朝食を食ふ。而して眠る。朝八時か九時頃に起きて昼食を食ふ事になるから、朝の九時頃より晩の七時頃迄は全く絶食の有様になる。

連日連夜我砲兵は敵の陣地を射撃して、歩兵線は掩蓋材料は現出し、明瞭に見える様になった。又敵の銃眼も能く見える様になったが、敵兵は中々勇敢であつた。それは、午後三時頃に中隊長は余の居る第二攻撃陣地へ敵情地形の偵察に来た。此の時、蝸牛双眼鏡〔双眼鏡の挿画あり〕を持って来た。余と共に敵陣地を見て居た際、敵兵の一人は歩兵陣地の穴より出で、赤い旗を以て左右に振り信号をして直ちに引っこんだ。暫くして又黄色い旗にて又々信号をした。丁度此の時は我砲弾が猛烈に敵陣地に落着して居る最中であつたので、敵ながらも其勇敢なるに感服した。中隊長は、本夜海泊河の中央に第二中間陣地を構築し、此陣地と交通壕を構築するので余と共に地形を見たが、直前の海泊河には水青く波さへありて非常に深く思われて大に心配し、如何にしてあの河に交通壕を構築するか大に心配せられ、余も又心配したのであつた。其処で此河の交通壕は工兵の協同を要する必要を認められた。而して第三小隊は散兵壕を、第二、第一小隊は其れに通ずる交通壕を構築する事を命ぜられた。而して中隊の位置に帰へられたのである。

余は午後五時頃、各分隊長を集め、例の目鏡によりて前面の敵情地形を見せしめ、本夜小隊の作業すべき区域と其実施要項との注意を与へて、尚食事運搬兵を早く出す事にした。午後六時三十分頃になるも食事運搬兵は帰へらぬのである。是より先き午後二時頃、従卒原田与茂助に命じて余のチョッキと空気枕とを韓家庄迄取りに遣つた。尚ほ寒いため木炭を持ち来たる事を命じ置いた。余は夕食来らざる前に、分隊長を連れて中隊長西村中尉と共に交通壕の経始に出掛けた。尚中隊長は田島伍長に河を渡す橋の為に掩蔽部材料の板を持たしめて行つた。尚是れが経始には工兵分隊長も同行したが、海泊河に来て見れば、其河は昼見たと異而實際浅き河で、深さは靴を没する位であつた。中隊長と余は非常に喜んだのである。此の時、敵は我れに光弾を発射し、時々小銃射撃を加へたので急いで経始をしたが、昼間能く地形を偵察して置いた為めに此経始は案外敏捷に出来た。

余は先づ各分隊長に海泊河に至る迄の交通壕の区分をしたのである。本日は敵のポンプ街よりもずっと前へ出て作業するので、背後より射撃を受ける景況にあるのである。又我砲兵の射撃は、時々味方の頭上にて破裂し危険である故、大に覚悟して居つた。午後七時頃、第二攻撃陣地に帰つた頃、丁度食事が運搬された。此の時原田与茂助は余の命じたる品と木炭をもつて来た。余は直に火を起さした。而して此の位置には三四日は居るのであるから、木炭を節儉する事と、尚火種を無くさない様にと命じた。飯が冷えて居るから飯盒を暖め、食事早々従卒一名を残し、尚此の陣地には工兵其他第八、第五中隊の兵卒作業に来たる為め、食事を取られたり間食を盗まれたりする故、各分隊に一名宛監視兵を残置した。

午後七時三十分頃より第二攻撃陣地前の交通壕の掘開を始めた。然るに第一大隊より次の如き通報あり。第一大隊の第四中隊は、工兵と

協力してポンプ街の外壕を爆破してポンプ街を占領する故、危険に付注意ありたしと。是れが為め第一小隊は交通壕を経続したが、第二、第三小隊は危険に付工事を見合せて居った。第四中隊の横倉小隊は、余の掘掘し居る交通壕を利用し、占領後直に散兵壕構築の目的にて土囊を運びつゝポンプ街の左側に迫った。午後八時頃、一大爆破と共に開声が聞えたと思ふ頃、ポンプ街上に兵卒の飛ぶのが見えた。其後寂漠に帰へり、光弾は発射せられた。此れにて占領を終り、第二、第三小隊は海泊河の前に出で工事に着手した。而してポンプ街上には散兵壕が作られた。

午後九時頃迄は敵の射弾も余なかつた為めに呑氣であつたが、午後九時三十分頃、第二回目の作業を分隊長に命じたる頃、猛烈なる機関銃の射撃を受けた。丁度此の時は此次に掘開すべき場所の事とて、未だ少しも掘開してないが、唯堤防の蔭である。併し海岸砲臺より側射を受けるので弾丸は身近に落着し、余も分隊長も等しく地面に張り付いて伏姿をした。午後十一時三十分頃、堤防の工事は終りて愈々堤防を切り割り、漸次地形の前面に傾斜する困難さ。土囊を使用して交通壕を作るべき事となつた頃、西村小隊より第一小隊は川を越えて少し工事を手伝つてくれといふて来た。余は、余の小隊が二日三日の夜は他の小隊に比し三時間許り遅く迄作業をして居つて、部下の疲労の程度見るに忍びず之れを遮絶した。然るに中隊長来たり又々余に之れを言ふた。余は今から川迄の作業をして終れば二時過ぎならん。本夜は兵卒疲労他小隊に比し甚しき故、川迄作業して歸へりたき事をいふた。此時中隊長は、第一小隊は川を越して五十米の作業をする如く命じた筈である、稍意気揚り聞き入れる様子なし。依て詮方なく川を越えて第六分隊を作業せしめ、二十米許り川を越して前に出した。此の交通壕は川の直ぐ傍にある為め水が湧き、且つ土少なくて積土す

る能はず。土囊を使用する外工事の仕方なし。本夜は土囊二千個許り持ち来たりある為め、土囊填充班を海泊河右岸の堤防の蔭にて作業せしめ、其地より運搬班を極めて運搬して交通壕を作りつゝあつた。

午後二時三十分頃、余は土囊填充班の監督を為す為め堤防の蔭にて一服為しつゝありたり。其時、俄然三発許り砲撃を受けて、其砲弾は十米許り隔てた処へ落ちた。多分、土囊運搬兵が運搬するのを、光弾の探照により発見せられたためならん。茲に於て余は其堤防の蔭に避けしめ、休憩をなさしめた。約五六分の後、最う弾も来ないと余は思ふて、さあ一始めよう、と声を掛けた。其一瞬间「カン」と耳も破りさく許りに一発の砲弾を受けたと思ふや、余も其付近に居りたる兵卒も皆壕内に伏姿をした。此の時毛受常吉はヤラレタ／＼と叫んだ。其傍に居りたる藤城文太郎は、偽りをいふな、オドケルナ、といふて居った。余と彼れとは一米も離れて居らなかつたから直に見てやつたとき、最う口から血が出て顎に流れて居った。其れ故口も聞かなかつた。余は、襦袢のボタンを脱して見て遣つたが異状はなかつた。直ちに口の付近に繃帯して看護卒を呼びにやつた。頂度其の少し前に第三小隊長竹田少尉は負傷した。又第二小隊の兵卒二三名負傷した許りであつたから、中々中隊は混雑を來たし、又士氣沮喪した。其内看護卒が来て見たが、矢張り口をやられたといふて、担架に載せ運ぶ途中絶命した。其れで中隊長は直に作業を中止して歸へる事にした。其処で引き揚げ人員を檢点して中隊へ歸つた。余は第二攻撃陣地の余の穴に來て見れば、竹田君は寢て居つたが、竹田君と声を掛けた時、彼は稍人事不省より醒めた。而して大した事はないが頭が廻はらないと答えて元氣であつた。茲に於て後方隊繃帶所に送つた。

毛受常吉は、其夜の中に後方に送つた。而して曹長と此の分隊より五名を出して、翌日火葬に付する事とした。

今夜のポンプ街の占領は誠に簡単なもので、ポンプ街を爆破して突撃した時は敵は窖室内に入りて堅く閉じて出でず。言語の通ぜざる為めに恐怖したらしかったが、降参すれば許すとの事の漸く其意味の通ぜられる、や、扉を開いて直ちに捕虜となつた由。そして此処には、独逸特務曹長指揮の許に独逸兵十九名、支那人兵四名居りたりと。尚ほ一ヶ月以前より此処を守備して居つて、敵情に就ては詳知する事なしと。此夜此の始末を工兵特務曹長より聞いた。工事を終り、後方に帰へる時の心は、先づ今日も命は助かつたと思ふて稍嬉しい様な感もした。尚ほ昨日より木炭を穴に持ち来たりし為め、暖かき飯と湯が呑める楽しみがあつた。

此の払曉も亦猛烈なる地雷榴弾の砲撃を受け、余の穴の十米許り隔つ処へも落ちた。余は穴に居る為め其地響は猛烈にて、腹部が一寸程動くのである。後方中隊の位置へも此の振駭すべき砲弾は連続発射せられた。是れの為め、中隊の士気を沮喪した事は非常なるものであつた。余は飯盒の飯を暖ため、従卒の湯し置きたる湯にて食事をなし、膝より濡れて冷たき足を温めた時の嬉しさと心地の良き事はなかつたが、此れを思へば兵卒は火もなく焚火も出来ず、食事は冷たきもの、湯も冷えて居る。中には作業中に他中隊の兵が飯盒の飯を食つて行つたとか、己れの間食はなくなつたといふ不平がこぼされて、実に可愛いそうであつた。余は其中にすや／＼と眠むつたが、砲弾の音と地響にて直きに眠が覚むるのであつた。

十一月五日 晴

午前八時頃目が醒めて、本日の昼食を八時三十分頃食ふた。而して又午後一時頃迄眠つた。此の四五日は顔も手も洗つた事がないので、不潔なる事甚しく、手は黒くなりて爪は延びて、自分ながらも自分の身体がいやになつた。

午後一時頃より漸く我が軍の砲撃盛んとなり、敵の陣地を例の眼鏡で見たが、敵の歩兵陣地は掩蓋を現はし、又鉄条網の破壊せられたるも見受けられ、唯一撃に突撃すれば陣地の占領は容易なるもの、如く考へられ、敵陣には一兵も見受けられないのである。午後五時頃、中隊より命令あり、昨夜ポンプ街を第一大隊が占領した故、之れが快復の為め敵は夜襲するかも知れぬ警戒を要すとの事で、又第一小隊は第三攻撃陣地を構築する命令を受けた。亦師団は六日の払曉若しくは七日の払曉に突撃を実施する予定なるも、其れ以前に於て機の乗ずるあらば突撃する計画である事も洩れ聞いたのである。余は分隊長を集めて此由を告げ、最う二三日には陣地に突撃するのであるから能く部下を督励努力を望むと告げた。而して第一小隊は食事は未だであるから、其の前に酒井伍長・大石軍曹は経始縄を準備して、食事前に経始する事を命じた。第二、第三小隊は昨夜の交通壕の補修工事及第三攻撃陣地に至る交通壕の掘開であつた。

中隊長の命令により、潜伏斥候として加藤上等兵、内山万寿藏、水野徳松、小田文七を第三攻撃陣地即ち海泊河左岸に出る事を命じ、其斥候は余と分隊長と経始に行く際同行する事を命じた。午後六時頃、陣地を出て経始に出掛けたが、光弾は猛烈に発射せられ、昨日構築したる中間陣地よりは前には出る事は中々容易でない。それも其筈である。今夜作業すべき地点は、正面の敵よりは二百米も離れて居るが、右の方の海岸砲臺の敵の突出陣地とは殆ど同線にて、其距離は矢張り百五十米も離れて居らないから、右の方から側射を受けるのである。又左の方も稍突出して敵の陣地がある為め、左よりも側射を受ける誠に危険なる地であつた。併しながら、早く経始をせざれば益々敵に偵察せらるゝ恐れある故、中隊長の指示により潜伏斥候と大石軍曹、酒井伍長、外に伝令生熊基（喇叭卒）を連れて前進した。丁度此の構築

すべき地点は敵の外壕の直前にて築堤したのであるが、併し幸ひ友軍の砲弾の破裂孔が少しはある。又凹き処も無い様であるが少しはあるので、此の経始中光弾及機関銃の射撃を受けたが伏姿をして漸く敵弾を免れて居ったが、敵の射撃は中々止まないで、無理にも姿勢小さくして地形を偵察して経始を始めたが、杭を持ち行く事を忘れたから縄を張る事が出来ない。丁度本夜は、昨日竹田少尉負傷したる為め、中隊長の注意により小円匙を持ち行き身を掩ひ自重せられたしとの事で、余も本夜は小円匙を持ち行きた為め、其れにて土地を掘り縄を馳るく張りて土を盛りて、之れを固めてなわを止めたが、伏姿をして居つては土が掘れぬので、膝姿をして掘りつ、縄を張りつ、経始をして、伝令生熊には細き木の枝を取りて杭を作らしめた。斯くして弾丸の飛び来る時は余は勢いを付ける為め、エークソ、畜生等と掛け声の勢で漸く大石、酒井の二人を助手として経始をした。

小隊の兵は、土囊運搬に二十名、食事運搬に二十名、第三分隊の多数は毛受常吉の死骸火葬の為め東李村に行く。尚ほ午後七時頃、右翼方面に敵の来襲ありたるもの、如く、敵味方盛に砲声小銃の音声をつんざき、第二小隊は中間陣地にありて死傷者を出し、為めに担架卒として四名、其外運搬者として四名を使役せられ、第二攻撃陣地に残り居るものは僅か二十名位に過ぎず。又食事も出来ず。其れ故、戦闘準備を為して第二攻撃陣地にありて敵襲に備へて居った。午後八時頃、凡而の使役帰来したる故急いで食事を為さしめ、午後九時頃より愈第三攻撃陣地の構築の為め出発した。

散兵壕へ兵卒を就け、工事を始むる迄は別に射撃を受けざりしが、凡そ二十珊米も深さを掘開したと思ふ頃、猛烈なる機関銃の側射を受けた。此の時、余は機関銃兵卒の掘開して居った壕に飛び込み、共に穴を掘りて敵弾を防いだ。此の陣地の構築に関しては幾多の困難なる

事あるも筆紙に述べられ難し。午前四時頃、此作業を終りて余の陣地に帰った。炭火起りて暖かい。羊羹を兵卒より貰った（李村に行ったものより）。煙草の補充あり。愉快極りなし。

所感。本日午後五時頃、留守宅より手紙来たり。子供の事、畑に大根茶葉の蒔きたるもの、話、ネーブルの色づきたる事等の処へ読み来たりたる時、余は昨日より毎日、余の命が今日か明日かと決心して作業に行く心の中を思ひ起せば、此の今頃の状況を電話が何かで話し度く思った。唯心の中にて大に泣いた。此の時、工兵の中隊長も居った。

亦工事して出掛ける急がしき時であつた。且つ夕暮にて手紙の文字も漸く読める位であつた。如何にも哀れなる、又妻の此の心の哀れさを感じたのである。此後の戦争に出発する時は、内地の宅の情況等の話は余り聞かしてくれぬ方、却而戦争するもの、身に取りては不覚の因となる。注意すべき事にこそ。而し故郷の様子知るも一つの慰問たり。四日五日の情況は、毎夕作業に出る度に今日は危い／＼と心に決して出て行く。帰る時は今日は先づ寿命が一日延びた事であると思ふて帰へる。本夕第三攻撃陣地構築の為め経始に行きたる時、千野中尉、機関銃の工事の経始に来たり。余を見て連絡すると共に、余にかぶり付て敵の射撃の中に肘を組み合ひて伏して話をしたのも、是れ人間の群集心理の然らしむる処か。親愛の度を増した感あり。

十一月六日 晴

午前七時起床。午前八時頃、高梨軍医、第一線の情況視察として来たり。余の穴室に来たる。交通壕の泥水に膝を没し、泥土付着し見苦しき様なり。続て砲兵将校来たり。敵の機関銃の位置の視察に来たり。蝸牛双眼鏡にて余と共に敵陣地を視察す。砲弾の威力により大凡そ敵の陣地及銃眼は分明するも、機関銃の位置等確実ならず。敵陣地の秘匿に就而は随分意を用ひたるものと思はる。砲兵将校は、中隊に

帰隊後大凡そ銃眼を目標とし射撃する事をいふて帰へる。余は分隊長を集め、戦争の話、及突撃は何時なるや、如何にして鉄条網は切断するや等に就き四方山の話をして、其話の中に略々決死をして働らくは此の二三日の内にある事を示した。

午後三時頃、田中中尉来たり。連隊本部を此付近に設ける積りであるが何の付近善きや。又第一線の場合如何等尋ね、其後色々の話しをなした。帰る時、電話線及電話機を此付近に置くから頼むといふ事であった。余は愈々本夜か明夜は突撃を決定する師団の計画らしく思はれた。是れが為め決死の覚悟をなした。而して四五日分の日誌を記して、余の死後は図囊に入れある此の日誌を必ず中隊の者に渡せ、然らば第一小隊の下士以下の功績は明瞭であると、分隊長及従卒にも能く言ひ含めた。亦本夜は必ず多忙にて如何なる命令あるかも知れず、斯くては夕食は早く喫する必要ありと思ひ、午後三時三十分頃より食事運搬者を出し、成るべく早く食事を持ち来たる事を命じた。

午後四時頃敵陣地を見たるに、毎夜吾等を右方より側射したる機関銃の位置は明瞭となった。之れは敵の陣地よりトンネル式にて崖の中央に銃眼を設け、小松が掩ふてあるのである。是れが我砲弾の為に小松と銃眼の材料を破壊したので、明瞭に見える様になった。午後五時前、又々前の砲兵将校来たり、中隊陣地の右翼にて迫撃砲を使用して敵の機関銃をたゞき付けんと。是れが為め、余に其肩牆を作る為め若干手伝ひをしてくれとの事であった。余は中隊長も承知ならばと心良く承諾し、尚ほ側防する機関銃の位置も教へて遣つた。此の時砲兵将校は、迫撃砲用装薬莢及砲弾を預けて行くとの事であった。其外余の陣地は工兵も来る、第五中隊も来る、突撃用梯子其他掩蔽部材料も置いてある。三日四日の二晩は中々混雑するのである。

午後五時、中隊長より左の命令あり（此の命令は大隊命令に基きて

出されたるもの）。第一小隊は昨夜の突撃陣地の補備作業、及陣地の左翼中央部に鉄条網を切断し、尚其れに交通の設備を為すべしとあつた。依て本夜は余程勇敢なるものを選抜する必要があつた。亦充分準備すべき必要もあつたから、分隊長を集め各分隊より志願者を募り、分隊長より其人名を出さしめ、余は次の者を選抜した。

鉄条網破壊班

I 酒井伍長 有ヶ谷上等兵 大石豊平 黒田一郎

II 大石軍曹 内山万寿蔵 古橋喜作 鈴木平吉

掩護斥候

I 山崎上等兵 松下啓二郎 鈴木藤一 三村新一 藤城文太郎

II 松浦金助 杉浦光一郎 梅原菊蔵 藤田常平 高塚一平

右の如く予定人名を決定して、余の命令に従て行動する事を予め命じた。余は分隊長より次の事を部下に伝達せしめた。本夜は多分敵陣地に突撃する事とならん。一死国に報ゆるは本夕にあり。汝等奮励努力目ざましき功績を現はして、日本国男児の名譽を發揮せよと訓戒した。

斯くして午後七時、第二攻撃陣地を出発して第三攻撃陣地（突撃陣地の事）に到着するや、未だ中隊長も来て居らず、他の第二、第三小隊も見えぬが、工兵小隊が瀕りに第三攻撃陣地を掘開して居るのを見た。そこで余は工兵に尋ねた処、此の陣地より三ヶ所許り交通壕を掘り割り、前面の鉄条網を切断、尚ほ最後の鉄条網も切断するのであると聞いた。余は先づ小隊の兵を全陣地に配布して横牆のくずれたもの及臂座、胸牆等の補修をなし、又予備弾薬の置き場、手榴弾の置き場の設備をなした。余の任務を達するには工兵隊に協力する方利益ありと考へて、工兵小隊長を尋ねたが遂に見当らず、余は然らば余一人にて鉄条網を切断せんと決心をした。

併し鉄線鉄は五個あるのみなるにより、予定人員より減んじて、次の如く人員を決定した。酒井伍長、有ヶ谷上等兵、加藤上等兵、大石豊平、黒田一郎、古橋喜作。掩護斥候は前に決定したるものをして為さしめた。余は卒先外壕に飛び込んだ。深さは二米位であった。此の外壕の石崖は白く石灰が塗りあるため、此の壕に入れば夜間と云へども敵陣地からは能く見える様になつて居るのである。輕装したる鉄条網破壊班を外壕の中に入らしめたが、中々飛び込まないので土囊を積ました。而して一人／＼壕に入るや、鉄条網の切断を始めた。此の鉄条網は有刺鉄線にして且つ太く容易には切れないが、全部切断せざれば刺が掛かりて障害になる為め、不都合である故全部切る事を命じた。少し切断した處で掩護斥候を外壕に入れた。而して前面の敵情地形に任じた。此の土地一体に湿地にて、横に何条も畑の中の畦畔の如く小溝があつて、深きは腰にも及ぶものがあつた。余は實際此の小溝に入りて其深さを検したのである。此の夜は一層寒き晩であつた為め、余は寒さの為め震ひ出した位であつた。

月は薄月夜なり。敵陣はボンヤリ黒く見え、余の後方にては鉄条網を切る音がキチンチャキンと為て居る。掩護斥候があちらこちらと偵察する。その内に光弾を余等の近傍に連發した。何時もならば伏姿も出来るが、本夜は地形が悪く水深き處ありて伏姿する理由にはいかない。屈がんで居る。光弾がなくなると直ぐ所を変へて作業を為さしめた。右の方では特務曹長が三名許り連れて鉄条網を切断して居た。余は、第一の鉄条網が首尾よく切断せられた其巾は、大凡そ百米とも思はれた。そこで酒井伍長に第二の鉄条網を切断する事を命じて、中隊の陣地に歸へり、詳細に敵情地形を報告した。此の時、敵は光弾を發射するも、小銃、機関銃の發射は誠に少かつた。丁度余が中隊長に報告を為し居る處へ大隊長より命令ありて、台東鎮東堡壘の敵は退却

せしものゝ如し、貴官は有力なる將校斥候を出して前面高地の敵情を偵察すべしと。

茲に於て小官は進んで此任務に服し、佐藤分隊を指揮して外壕に躍り入りて、佐藤伍長に兵卒二名を付し先頭に立たしめ、余と酒井伍長と共に敵前最後の壕に至る。他の残部は山崎上等兵に指揮せしめて高地基脚に待たしむ。余の考へにては、最後の鉄条網を切断し、敵の陣地に至り、機あらば一分隊にて此の陣地を占領する考へであつた。丁度都合よく敵外壕の前岸に達した頃は午後十一時頃であつて、敵は我後方陣地に向ひ發射するも、余等の此處に到着したるを知らざるものゝ如くであつた。最後の壕の鉄条網は最初の鉄条網より余程薄弱であつた。余は直に壕に入りて、鉄条網を切断せんと酒井伍長に鉄条網切断鉄は持ち居るやと問ひたるに、当然持ち來たるべき鉄を持て居らなかつた。茲に於てその失敗を悔ひ、未だ後方に居る鉄線鉄を使用し居る兵卒を呼ぶ事を命じた。此の時敵の陣地の直前より一發の小銃射撃を受けた。

茲に於て、先づ部下に其近傍にある砲彈の破裂孔に部下を入れ、余は酒井伍長と共に砲彈破裂孔に入りて鉄線鉄の到着及時機の來たるを待った。此の時、敵は漸次増加し、機関銃、小銃彈の射撃が猛烈になつた。余は此の孔にありて持ち來たりたる円匙と手と足を以て此の孔(を)掘開した。而して丁度夕暮間食として貰ふたパンがある事に氣付きて二個宛を食して銳氣を養つた。然る處に有ヶ谷上等兵、鉄線鉄を持ち來たりたるを以て、愈々強行して鉄条網を切断して尚ほ敵陣地に入らんと考へ、酒井伍長は徒手なるを以て軍刀を彼れに与へ、余はピストルのみを携持して壕内に入り、鉄条網を切断す。暫くして敵は機関砲を以て直前十五六米より射撃を受け、酒井伍長先づ負傷し、赤堀藤太郎、藤城文太郎、壕内に即死。鈴木藤一負傷す。依て余

は佐藤伍長と共に死傷者を壕外に出す。此の時、余の刀帶を以て壕内より負傷者を引き揚げた。

酒井伍長を先づ砲彈の穴に入らしめ、余は部下に命じて、自分の先きに掘開した穴を尚ほ一層大にする事を命じた。而して佐藤伍長をして此の状況を報告せしめた。而して後方より射撃せざる事を依頼し、尚ほ手榴彈を持ち来たる事を命じた。暫くして佐藤伍長歸へりて曰く、将校斥候は早く引き揚げよと。此の時、敵の光弾、機関砲、小銃弾は益々我頭上を猛射し、昼よりも明白にて穴の中にじっとして居るより外に仕方はなかった。中隊より五名の收容兵来たり。梯子を持ち来たる。

余は敵彈の隙を利用して酒井伍長の傍に來たり看護してやつた。又有ヶ谷上等兵も來たり看護す。此穴は余り大きくなかつた故、余と有ヶ谷上等兵とは共に胸より上は土地の上に出て居った。酒井伍長の負傷は臍部より腹部に掛けて三ヶ所の負傷であつて、繃帶はしても大腸が出るのである。腹へ入れて遣つても又苦しむ為めに又腸が出るのである。余は酒井伍長に確かりせよといふたが、余は此の時どうせ助かるまいと思ふた。酒井伍長曰く、苦し／＼ドウカ軍刀にて切つてくれ、余は酒井樺平の息子なり、父に頼むと。余は涙を呑んで、傷は浅いから暫く待てよと、大に意氣を奮勵せしめた。酒井伍長曰く、頭が低いから高くしてくれと。故に余と有ヶ谷上等兵とは臂を枕にして遣つた。腰が低いから高くしてくれと。其処で又二人の足を彼の腰の下に入れて遣つた。此の間、敵は猛烈に射撃して止まず。收容兵は前の壕に入りたる假如何ともする能はず。斯くて余も亦危しと思ふて居る時、一彈來たりて有ヶ谷上等兵の臂を負傷せしめた。其処で後方に歸らしむ。茲に於て余は收容兵に命じ、藤城の死骸と酒井伍長とを兎に角山の基脚迄連れて行けと命じた。酒井伍長は十八貫もある大男な

り。漸く持ち來りたる梯子に載せて山の下の方へ引き摺りつゝ、下つたのである。折しも敵彈來たりて又もや酒井伍長の臂部に命中す。杉浦光一郎來たりて余の繃帶もくれろと。茲に於て余は繃帶を出して遣つた。再び酒井伍長は砲彈の穴にて新らしき傷の繃帶をせられた。余は七八名のものと自分の掘開したる旧の壕に入りて部下を督勵した。折しも此の時、余の伝令たりし生熊基の來たるに會し、如何して來たかと尋ねたが、今來ましたといふのみであつたが、場所が／＼と深く尋ねもせずして居った。斯くして死傷者は山の下の方に運ばれた。余は斥候の任務を尽して報告したからして歸る必要はない。本夜一晚は此の地にありて壕を掘開し、折よくば敵陣地へ乗り込むか、然らずんば明晩の夜襲の爲め拠点となさんと考へて少しも歸へる考へはなかつたのである。

午前二時頃と思ひし頃、我が砲兵は敵の第一線歩兵陣地に向て榴散彈を浴せかけた。然るに我々は敵陣地より二十米も離れて居らぬ。且つ夜間であるからして、敵の陣地より尚ほ手前にて破裂する砲彈多くして、吾々の近傍に落着するもの多く、吾々は遂に四方より射彈の中に入れられた。斯くして折角の望「み」も水泡に歸し、運悪くば味方の彈丸に當りて大死するの止むを得ざるに至る。斯くてはならじと、茲に死を決して後退する考へを爲した。それ故残る部下に命じて、一人一人敵の光弾射撃の間隙を利用して中隊の陣地に歸へる事を命じた。而して最後に余と佐藤伍長と伝令生熊と三人残つた。其処で余は佐藤伍長に歸へる事を命じた。佐藤伍長曰く、此処は危険なる位置なれば早く伝令を連れて歸へられたし。余は尚ほ此付近に死傷者の武器装具等を見て歸へると、再三遂に頑として聞かず。余は茲に後事を頼みて生熊を連れて歸へらむとす。軍刀及びピストルの所在知れず。多分土に埋められたるならんと積土したる土の中を捜して漸くそれを見

出し、生熊基に余のピストルを持たしめ、余は円匙を持ちて帰へる事にした。

而して準備して射撃の間断を考へて、掛け声諸共其位置する穴より飛び出したが、銃砲弾の猛射に遭ひ、直に次の砲弾の破裂孔に入り、又々穴を掘開したが、生熊は如何にしたか不明である為め其付近を捜したるも其影を認めず。詮方なく余は又々射撃の間断を利用して穴を飛び出で山の其脚に至る。光弾連発せられ、屢々身を地上に伏せて漸次第二鉄条柵に至れば、最早や収容したものと考へ居りたる収容兵は、酒井、藤城の死傷者を其假とし、其位置に伏して身動きもせず。如何にせしやと尋ねたるに、左の方に敵兵二三名あり、吾々は武器を携帯せず、故に此の地にありと。余は大に其誤れるを話し、酒井運搬の為に四名を付し、藤城の為に二名を付し、帰へる事を命じた。

土地沼地にして水深き処あり。堤防に沿ふて帰へるも片足はスベリて歩き難し。併し其の堤防を利用せざれば右方よりする機関銃の掃射の爲め危険なり。余は此等収容班を激励して其堤防の中央迄来たりたり。収容班曰く、何れの方角に行くやと。丁度光弾の爲めに其付近明白となりたる為め、後方の白き壁の如き涯の中に黒く見ゆるは中隊の陣地に入る入口なりと。茲に於て其入口に向て収容班は行つたが、其入り口は絶えず敵の機関銃、小銃弾を浴せ掛け、其付近に火花を散らして居つたから危険であつたが、幸ひにも漸く収容を終へたのである。

余は其後より壕に掛けある梯子より中隊の陣地に帰へり、中隊長の許に至り詳細に報告した。而し帰来したるものを尋ねたが、末だ帰へらぬものありとの事に心配して居つた頃、已に先きへ帰へらしめたる山崎上等兵、藤田常平等軽傷を負ひ来たる。此者に部下の様子を尋ねたるに、佐藤伍長は大腿部を負傷し、生熊基は戦死し、山口善平も又戦死し、星野寿一負傷しありと。

依て先きに斥候たりし三村新一を案内者とし、森下宗一、小塩卯作をして収容せしめた。此の収容兵は万死を期して敵前に至り、山口、生熊を肩にして帰へる。星野寿一は如何にと尋ねたるに、小塩卯作曰く、星野に遭ひたるに収容に来てくれたのは誠に有難し、併し胸部を痛く負傷したる吾は、背負はれて帰へる時は苦しき余り死するは常なり、ドウセ死すならば此地にて死なんと。小塩は、然らば後刻担架にて収容に来たる故暫らく待たれよと。小塩は山口、生熊の二名を他のものに背負はせ、自分は帰路堤防の踏み難き土地を円匙にて改造して足掛りを作り、再び往復する時の爲めにせり。小塩卯作、余に帰へり報じて曰く、星野を収容せんとしたるも前記の如き始末に付き、二度の収容を約束して帰へりたり。彼れは涙を流して有難しと感謝せりと。依て尚ほ二名の沈着したる兵と担架一台を借り受けたし、然らば収容せんと。余は星野寿一を平時従卒として使用し、戦地に於ても彼れと共に勇敢に行動し、地雷火も掘りだした勇士なるを思ひ、又星野の父よりは再三手紙を貰ふて、暗に彼れの安全なるを思ふて居つたのである。小塩卯作は又余の従卒をなし、星野と共に地雷火を掘り、共に勇敢に働きたる戦友にして、且つ郷里は近きとの事である。そこで一台の担架を後方に取りに遣つた。而して収容に任ずべき兵卒を捜したけれども、皆疲労の爲め眠り居るのと、勇敢此の任に当たるもの認めず困り居りたるに、平素最も臆病なる杉山幸作此の任に預かりたしと、又鈴木米太郎上等兵進んで此の任に当たらんと。其処で小塩をして色々注意を為さしめ、担架の分解結合の検査を為し、午前四時頃、又も銃砲火を冒して危険なる敵陣地前に至り、約一時間以上も掛かりて漸く五時頃収容し来れり。此頃、夜はホノボノと白み出した。尚一名赤堀藤太郎は外壕にありて戦死しあるも、銃砲火猛烈にして収容出来ず。又本夜を利用して収容せんと思ひ居つた。余は此の夜、地形偵

察の爲め湿地に入りたる爲め、腹部迄も水を付けたる爲め、非常に寒さを感じ、手足は全く感覚を失したり。

午前六時三十分頃、敵の野砲猛烈にして、後方部隊は実に危険であつた。併るに、我友軍左翼には聞声と共に霞かに万歳の声聞けると共に白旗を樹てたる様子なり。暫くして中隊長より突撃前進の命あり。余は直に部下を督励して壕内に入り、刀を抜き部下に着剣せしめて前進し、正に突入せんとするや敵は陣地上に現はれ白旗を振る。此の前進中、海岸砲臺よりは射撃を猛烈に加へたのである。竹田少尉は、此の突撃に後方より来たり参加し、再び手の小指に負傷す。

午前六時四十分頃、17高地西方陣地を占領し、続いて大隊長、連隊長も来たり。旅団長も亦此陣地を占領す。第一大隊方面は我れに遅るゝ事十分以上なり。各高地には旭日旗、連隊旗、朝日に映じて翻りたり。万歳の声、天地も動ず。捕虜四十名、鹵獲品多し。余は此の陣地を乗り取ると共に落涙して止まず。万歳の声も出ない。唯二三時間前に、多くの忠勇なる部下を死傷せしめたるを遺憾に思い、其英霊に謝したのである。

午前七時モルトゲ砲台に前進し、此の地を占領。捕三十九名あり。午後三時頃迄、余は疲労のためと部下を失ひたる悲哀の心と相和すると共に、数日間眠り不足の爲めに、目を張らして遂にモルトゲ山麓に何事も知らず能く熟眠した。午後三時より各分隊の兵一名宛を連れて、酒井伍長、生熊基、山口善平、赤堀藤太郎、藤城文太郎の遺骸の火葬を爲す爲め第二攻撃陣地に至り、其夜遺物を取り纏め、曹長と共に火葬に付した。一同整列して別れを告げ、燈火を揚げ、花を手向けて、忠勇なる部下と別れを告げ、夕陽西に没し一段の寂寥を感じた。各所に火葬の煙りの赤く揚がるを見、一陣の風又彼等の英霊を見舞ふ如く、余は心の中にて泣いて居つたが自然と目にも亦涙が出て仕方な

いのである。其れも其筈である。僅か二時間許りも罹からぬ中に彼の鉄壁も落ちたのである。余が六日夜の任務を受けざらんか、矢張り此の城も落ちたのである。小隊中にて最も勇敢なりし分隊長酒井を失ひ、小隊の伝令として能く忠実なりし生熊喇叭卒、殊に死地に来るべき任務を有せざるに余を慕ひて尋ね来たりたる生熊の心根を思ひ、長く従卒として且つ戦闘に従事したる星野を失ひ、又戦闘中絶ず最も勇敢なりしものを失ひ死傷せしめた事を思へば、如何で嬉しからん。如何で是れが泣かずに居られん。然りと雖も、余の小隊より斯くも多く死傷者、犠牲者を出したるため、大隊連隊の突撃を迅速な（ら）しめ、特に第六中隊をして最も早く敵陣を乗っ取る事を得せしめたるもの、一つに此の犠牲者の賜物たる事を銘じて忘れるべからず。

十一月八日 晴

午前八時、戦死者の遺骨を拾ひ、午前十時頃モルトゲ山麓露营地に歸へり、戦死者の火葬に対し中隊長に報告し、功績名簿の原稿を作成して呈出した。此の一日戦役中の感想に諸感交々至り、最後の晩の事を思へば流涕禁ずる能はず。余は部下の爲めに其戦功の充分天下に発表せらるゝを望み、余の心を慰めた。寒氣殊に強く、一晚中まんじりとしなかつた。

十一月九日 晴風強し

午前九時、モルトゲ山麓に整列。天皇陛下、皇后陛下、殿下の有難き御勅諭と聖旨、御令旨を賜はり、尚大隊長より戦後に於ける訓戒を受けた。

十一月十日 晴

午前、各親戚、知己一同に対し無事戦闘に参加したる通報を出す。戦死者の爲めに支那人を雇ひ、17高地に其塚を作り、正午露营地四方兵營に至る。午後一時より功績の調査をなす。中隊長は余の功績と部

右人名の者、大正三年十一月六日夜、將校斥候として海岸堡壘東方堡壘の敵情偵察を命ぜられ、鉄条網破壊班と協力し、敵の銃砲火を冒し、巧に敵の照明彈照燈の間隙を利用し、敵前約十五米の外壕内に進入し、破壊班の実施せし鉄条網の破壊口より前進して敵情を偵察せんとする際、機關銃砲並に小銃の猛火を蒙り、伍長佐藤梁一、一等卒星野寿一重症を負ふに至るも屈せず、二等卒三村新一をして先づ知り得たる敵情及將校斥候の現況を報告せしめ、巧みに我砲彈の破壊孔を利用し、午後十時より午前三時三十分迄該地に停止し、敵情を候察し、中隊より派遣せる死傷者收容班と協力して死傷者を收容し、午前三時

二等卒 藤田 常平

斎藤 聖 二

伍長 佐藤 梁一
二等卒 神谷 貞一

モルトゲ山麓の野原に露営中は非常なる寒冷にして、風強く夜中二時頃より眠る能はず。本日は四方兵営内に宿営し暖爐あり、浴槽あり、寝台あり、稍生活状態良好となる。

十一月十一日 晴

四方バラックにて唯何をなす事もなく暮した。功績の調査を為し始めた。鶏の安価なる為めと、山東菜葉の微発出来る為め、毎晩酒池肉林の有様であつた。

十一月十二日 晴

特筆すべき事なし。

十一月十三日 晴

藤川大尉、鹵獲品整理委員を命ぜられたるにより、中隊全員にてモルトゲバラックに至り鹵獲品の整理を為す。独逸人の贅沢なる今更述ぶる必要なきが、一寸所感を述ぶ。隊長らしき室内は安樂椅子、藤椅子等五六個あり、テーブルの上には机掛けあり、机と鏡と共に付きある机あり。応接室、居室、寢室、何れも華美を極められ、室内に洗面所あり、化粧部屋あり、置き鏡あり、写真機あり、猟銃あり、蓄音機あり、其他珍奇材宝数多あり。炊事場に至れば珈琲あり、コ、ワあり、缶詰肉、バター、シヤンパン、生ビール、葡萄酒、ウイスキー、亦我々の見たる事なきヂヤム、キユウリの缶詰あり。又意外に感じたるは将校室、下士官、兵室に至る迄美人の写真あり。殊に日本婦人の絵葉書等盛んに壁に掛けられありたり。此日、中隊長の厳命により、唯ランブと石油及び靴下位の占領を許された。此夜よりハイカラの食料品、コ、ワ等毎晩御馳走となる事を出来た。

十一月十四日 晴

此の日、星野寿一の傷死の通報と共に遺骨來たる。17高地に至り墓地の整理をなし、花を手向け、帰營す。慰問袋。待ちに待ちたる慰問袋は今日初めて渡された。実に嬉しかった。

十一月十五日 晴

記すべき事なし。

十一月十六日 晴

入城式あり。第二大隊にては増田大尉中隊長とし、小隊長は余と藤田中尉、松山中尉にて、其編成は第五、第七中隊より一小隊を出し、第六中隊より一小隊、第八中隊より一小隊を出す事に決定せられた。午前七時、連隊は整列。同時軍旗を迎へ、意気揚々と喇叭の音勇ましく青島街道を前進し、先づモルトゲ兵營北麓野原に集合し、休憩す。午前九時より第十八師団の各歩兵隊、続て第三十四連隊、第六十七連隊、英国軍、騎砲工輜重兵の順序に選拔せられたる各将校、四列側面行進にて青島市街に入り、約一里程行軍して、休憩の後再び側面行進に移り、總督官邸の前にて行軍縦隊の俣神尾司令官に対し分列式の敬意を払らひ、青島の競馬場に設けられたる忠魂碑に対し招魂祭儀式ありて、終りて午後三時頃帰營す。

忠魂の碑は一尺五寸もある角材を建てられ、其周囲は積土せられて香花盛り手向けらる。供物も多大であつた。独立第十八師団戦死病没者の碑と書してあつた。実に此の犠牲者を思ふ。妙に余の部下たりし忠勇なる部下の心情を思ひ遣り、流涕禁する能はざるに至る。

青島の市街には本月初めて入つたのである。先づ道路は砥石の如く、或る部分はアスハルトにて、或は煉瓦にてベトン式に塗られて居る。又建築物のなき道路には両側に並木が正しく植えられて居る。実に立派なる市街である。建築物は丁度活動写真に見らるゝ直立的のもの

の許りにて、其建物の色どりが中々美術的である。亦公園式の庭園が中々多い。殊に総督邸の如きは海岸の山腹にありて、一眸に膠州灣を見下ろし、夏なりせば如何に涼しからんと思はしむ。其前なる海水浴場は又遠浅にして砂地、且つ風景絶可ともいふべき地なり。青島市街内支那町は、矢張り西洋式なるも道路の不潔なる、家屋内の不潔なる曰はん方なし。戦後独逸人は青島市街内に沢山居つて、此の入城式の際も平氣にて却て得意顔に我々を見て居るのである。婦人小兒も亦時々見受けられた。支那人は道路の両側に並んで居る。飛行機が此の入城式の有様を、さも勇しく愉快氣に見舞ふて居るのであった。捕虜が未だ内地へ送られぬものが百五六十名も市内に居つた。皆元氣にて嬉々たるものである。印度兵も此入城式に参加した。中々軍紀が正しく、英国軍よりも真面目であると思はれた。色の黒いのは又格別にて、多くのものが同じ様に腮に真黒の髭を延ばして居る。

十一月十七日

午前九時より中隊の攻囲作業したる跡の測図をなし、午後三時頃帰隊す。その外別に記すべき事なし。唯毎日毎晩何の為す事もなく、鳥肉、牛肉、豚肉、占領品のコ、ワ、下給品の酒にて山東菜葉の味良きものゝ食飽く程であつた。尚ほ守備隊に残るや、其編成、凱旋の夢の話は、常に吾々の話題となつた。